

土 淨

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
昭和十三年十二月廿日印刷納本

(毎月一回一日發行)
昭和十四年一月一日發行

第五卷 第一號



一
月
號

昭和

◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります。

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務宛に！領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

本社營業所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 電話牛込 (34) 代表一五一〇番

櫻町營業所 東京市牛込區櫻町七番地 電話牛込 (34) 代表二四四〇番

銀座活字
販賣店 東京市京橋區銀座七丁目四番地 電話銀座 (57) 代表〇〇七四番



大日本印刷株式會社

大阪出張所 大阪市北區西堀川町三四

神戸代理店 神戸市神戶區榮町四丁目三六

滿洲國代理店 奉天市鐵西區中央路二二



◇浄土 第五卷 第一號 一月號 目次◇

表紙……………中島松二

扉繪……………鈴木金平

浄土教と現代

故渡邊海旭師……………(六)

門の哲學……………佐藤良智……………(一六)

銃後の念佛者……………佐藤春夫……………(二〇)

萬人の救ひ……………岡本かの子……………(二六)

墓を刻む……………吉田絃二郎……………(三三)

現世を否定する心……………倉田百三……………(四〇)

信仰相談……………中村辨康……………(五一)

新春閑談……………近藤浩一路……………(五一)

實話不思議な夢……………藤井敏雄……………(五三)



陸軍病院を訪ふの記……………長田たい子（三〇）

法然上人の家系を聴く座談會

（三）

時代小説 劍禪の拔討……………小島健三（二六）

短篇小説 最後の勝利……………双葉信（四〇）

童話 赤い手袋……………小川金英（四八）

歌 壇……………與謝野晶子（五五）

俳 壇……………太田耳動子（五七）

法然上人の御忌……………編輯部（五九）

日常勤行式解説 心への主人公……………中村辨康（六五）

慰問浄土寄附者芳名……………（六七）

編輯後記……………（六九）

◇浄土第五卷第一號一月號目次◇

健康の安全地帯

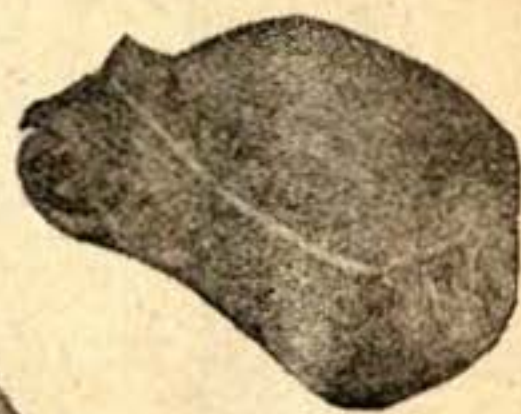
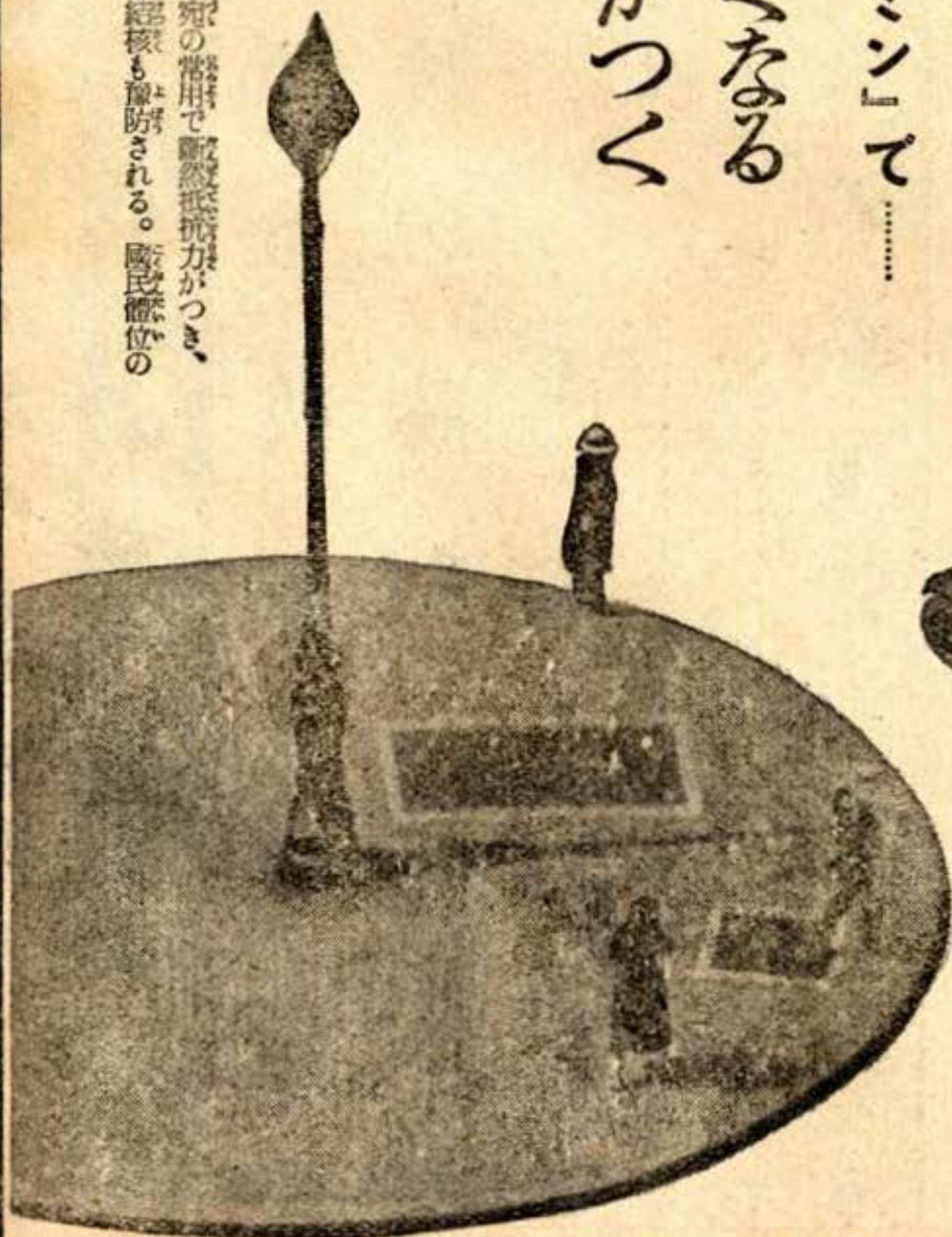
朝夕一球宛の

「理研ビタミン」で……

風邪をひかなくなる
結核を防ぐ力がつく

見よ！この力價！

理研ビタミンは純粋のビタミンAとDを眼みよいグロビニール球に包んだ強力製品です。一球中に七〇〇國際單位、すなはち鰵肝油二十五分のビタミンAを含有し朝夕一球宛の常用で断然抵抗力がつき、呼吸器が強化され、風邪をひかなくなり結核も豫防される。國民體位の向上に理想的の營養劑として推賞される。



理研ビタミン

(包裝)

四十球入 百球入
五百球入 千球入
婦人子供用小粒製品

五拾球入 一、三〇
百球入 二、五〇

浄土

一月號

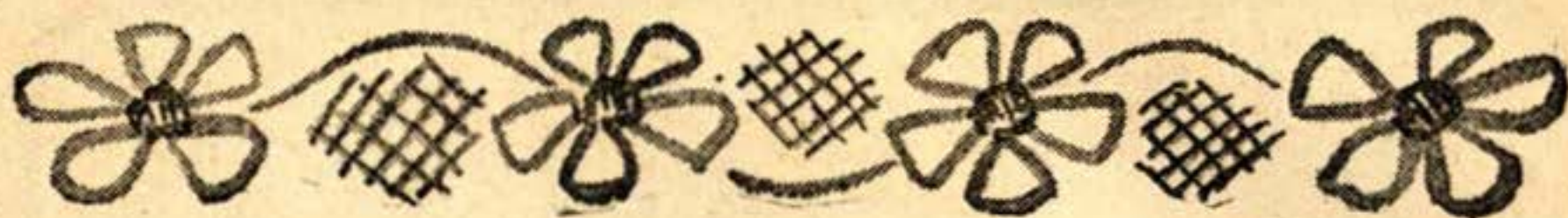
さへられぬ光もあるを
をしなべて

へだてがほなる

あさがすみかな

法然上人詠歌





淨土教と現代

故 渡 邊 海 旭 師

一、淨土教の佛教に於ける位置

- イ、空門に於て
- ロ、無我因縁に於て
- ハ、大智慧に對して
- ニ、理觀に對して

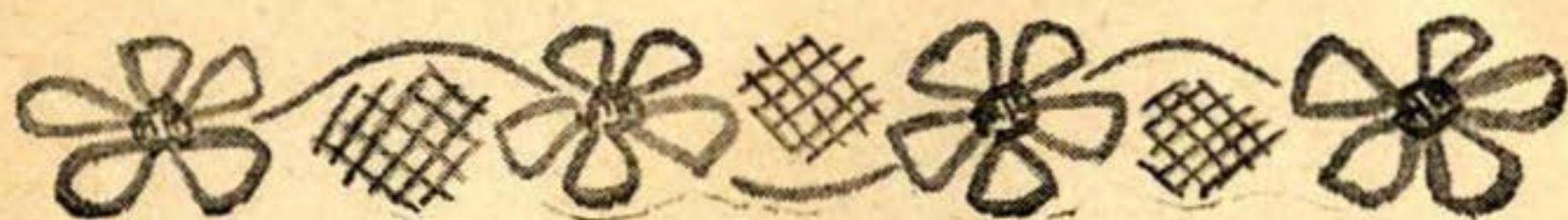
二、現代思想と淨土教の特色

- イ、普通の救済
- ロ、實行主義
- ハ、形式儀禮の徹廢
- ニ、直截、簡易
- ホ、現代批判力(厭欣)

此文は渡邊先生が増上寺の日曜講演に話された講話の一節である。淨土教の地位並に淨土教が現代人に如何に交渉するかを語つたもので此の前に序論とも云ふべきものがあるが、夫は私が先生の許しを得て金田明進君に日曜講演を筆記し出版したい念願に依つたものであるが、第一講の分は先生の手元へ差出して訂正を求め續いて第二講第三講と校閲を遂げる筈であつたのが、先生の御逝去に依て講演も中断され本講だけが私の手許に残されたのであつた。本稿は其第二講第三講の二回分の要約である。(中村辨康)

一、淨土教の佛教に於ける位置

國際問題も社會問題も佛教の信仰と其の實行とによつて解決することが出来る。然し、天台あり眞言あり禪ある中に淨土教は佛教の如何なる地位を持つものであるか。



佛教の諸宗教と異なる特色は、神の思召や人間以上の力によつて人間が救はれることなく、自分の智慧知識で進んでゆくことである。然るに淨土教は智慧で行くのではなく信仰を以て行く。又佛教は哲學的に一切の差別相を認めない。差別相を認めるのは人間の制限されたる知識で見ることであり、それは實際上の本體に於ては價值なきことであると考へる。然るに淨土教では極樂を西方淨土として希ふ。従つて、只だ一應佛教を眺め、其の眞意を究めざるものには、淨土教は劣等なるもの、愚夫愚婦の信ずる小乗の教なりと云はれ、彼の道德と云ひ見識と云ひ日本佛教の第一人者とさるゝ夢窓國師すら、淨土教の一端を見て、惜しいかな淨土教は小乗なりと云つた。一見如何にも然り見える、佛性平等一切皆空が佛教なりとすれば、西方淨土を專念するは劣等とも見られる。然し今こゝに、これらの點について、淨土教の佛教に於ける位置を明かに述べる。

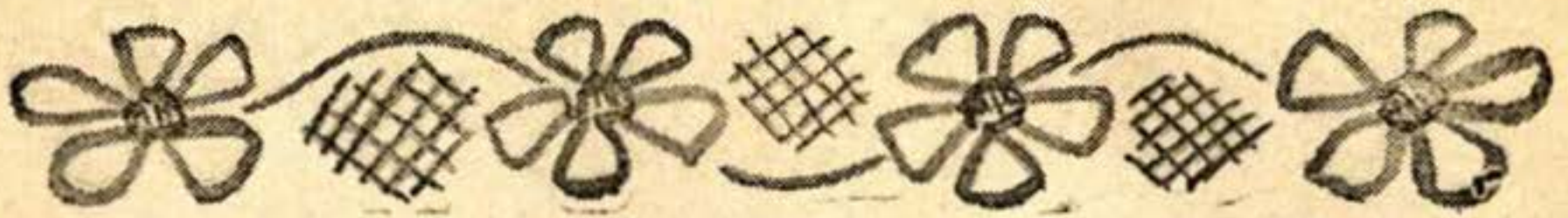
イ、空門に於て

空とは平等である。責任義務も相互平等であるべきである、然るに彼と我と差別に執はれ易きが常である。空は之を眞空と妙有とに分けて考へることが出来る。眞空とは迷妄の消滅することであり、妙有とは自由のはたらきが出来ることである。淨土教は主として眞空より妙有の側で議論する。他の佛教は主に眞空の側に立つ。即ち眞空は平等門を主とし、妙有は差別門を主とする。故に佛教に於ては眞空を性とし、妙有を相として、この兩者の缺くるを頑空なりとする。佛教には空の方面だけでなく、生きて働くことの上に自由の天地あることを認める、それが淨土教である。絶對平等の理の外に、生ける人間の上には實際方面が無ければならない。

ロ、無我因縁に於て

無我因縁は佛教の根本である。一切の成立つには縁(多くの條件が)必要である。故に佛教には自力、自分で働くことに眞の意味を認めない、自分の起臥はすべて宇宙の法則に支配されてゐる。この點で他力が認められるのである。自分の足で歩くにも、道路、引力、乗物と種々なる力が作用してゐる。

釋尊の教の中にも、佛教に入るには三歸を根本とされてゐる。こゝに佛教の眞理を認め、飽くまで三寶の力によつて修行するものである。その最高の力、これを最高増上縁とし、之を阿彌陀にたのむのである。故にそれは不純なものではな



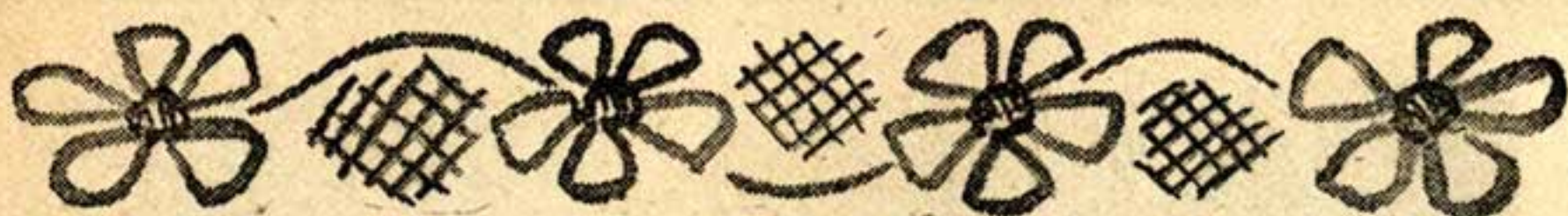
くして佛教そのものである。淨土教はこの因縁の上に大なる力を認め、且つ大なる基礎を有つものである。

佛教の修行は自心（佛性）と因縁（増上縁）とによつて完うされる。自心を主とするものを聖道門と云ひ、因縁を主とするものを淨土門と云ふ。自心と因縁とは不離のものであつて、たゞ何れが多分であるか否かである。而して、諸法は縁に依つて生ず、一つの草花の育つにも水、土、太陽の熱、空氣等一切の力が必要である。佛性をむすぶ人間の心も如來の育てる力がなければならぬ。その天地如來の力にすぎると云ふ考へが淨土教の立場である。又これを、願心（理）と因縁（信）とに分けて、前者は天台眞言の立場であり、後者は淨土教の立場であるとも出来る。九條武子夫人の「大いなるものゝちからにひかれゆくわがあしもののおぼつかなしや」と云ふ歌にも明かに淨土の立場を味ふことが出来る。人間の意識としても、單に自己の生死のみに諦めを見出すことは淋しい、そこに如來の護念を有難く受けるのである。禪と淨土教とは不離のものである。禪のみで淨土教がなければ失敗を招くものである。少しく禪門に首を入れただけで、佛もなく法もなく、大乘は愚の至り、罪もなければ善根もないと云ひ放つのは惡平等に墮したものである。明智光秀が信長を殺して善惡不二門を考へたのは此の點から見た誤りである。淨土教に於ては、亂倫背行の行爲の成るを佛の慈悲に訴へても、その願ひは遂げられるものではない。明の永明が云ふやうに、禪の虎に淨土の翼があれば一層強いものである。以上、大體佛教の因縁無我論から考へて、それを最も徹底せしめたのが淨土教であると云ふことが出来る。

ハ、大智慧に對して

次に佛教は大智慧の教である。釋尊の悟りがそれである。佛とは覺であつて、大智慧の眼ひらき、一切の眞理を究明するのが佛教である。

英國のペルトランド・ラッセルはキリストよりもソクラテス、釋尊の優れたることを説き、ソクラテスはキリストよりも道德上に優れ、釋尊は道德上にも知識上にもすぐれてゐると書いてゐる。ラッセルは現代人の好むものを書く、それは佛教の大智慧の方面を書くからである。又、佛教が世界的哲學的宗教として最も價值あることは勿論である。曾つて日本に滞在してゐた獨逸のゾルフ博士が、現代思想に必要なものは哲學と佛教であると云つた。然し、佛教の偉大なるは大慈悲門である。單に智慧のみであつてはカントやヘーゲルと同じである。大慈悲門あつてこそ佛教の特色は見られる。而



してその佛教の慈悲は、現代の道德宗教の上にも徹底せる力を現すものである。

大智慧門の現れとして出たのは天台、華嚴、法華の教であり。法華は其の代表とされ、これを出世の本懐と云ふ。釋尊は三十歳に成道せられ八十歳で入滅せられる迄、その五十年間は總べての者に大批判を興へられた。其の覺の教の根本は法華であり、これは華嚴、涅槃を要約せるものなりと云はれるが、これだけであつては未だ完きを得ぬ。社會には眼あき一人眼くら千人で、惱めるものは千人も居るが、惱みなきものは一人の割である。従つて、佛教の眞理を理解せぬものが多い。こゝに於て如來の大慈悲教が必要となり、淨土教が出るのである。これを無量壽經には大悲本懷と現はされて居るが、これは如來一代の説法の中の一苦しみ惱む者、最も劣等なる者を救ふ教として出たものである。故にこれに比すれば、法華は最も劣等なるものには餘りに立派過ぎる。この最後の醍醐味とも云はるゝ法華を味ひ得るものは極めて少數であつて、大多數は、米の飯でも粥でもよい、調味極められたものでなくてよい、その飯たり粥たるものが淨土教である。即ち淨土教は大慈悲の教である。故に、汲めども盡きぬ群盲を救はんと欲する所に淨土教の眞意があるのである。

二、理觀に對して

第四に佛教には理觀（理論の教）の立場がある。これは人間生活の上に大なる力を與ふるものではない。それよりも形式を離れた、難行ならざる、實行出來うる易行が必要である。生活しつゝも、苦みながらも、行ひうる教、實生活に即する宗教が必要である。佛教は山中の庵寺に入るべき理論的宗教ではない。勿論佛教には戒法を持ち、經を誦し、山に入る場合もある。然しそれは困難事である。商人、勤め人が其の業務を爲しつゝ、出來る教、生活を超越せざる教が必要である。その生活に即する教、それが淨土教である。

以上で淨土教の佛教に於ける地位が大體解る。こゝは淨土教が高等であるか下等であるかは別問題とする。たゞ自分で信じ、實行するに適するものたることが尊くて、自分の行ふに適せぬものが低級であると云ふことは、誤りである。とにかく、これらの必要の上に淨土教が現はれたのであるから、それは佛教の成立上無くてはならぬものである。法然上人が「各宗共に一切經あり」と云はれたことは、各々自分の信仰を主とした道ありと教へられたことで、そこに上人の卓見、淨土教の尊嚴が巍然として仰がれるのである。（つゞく）



銃後じゅうごの念佛ねんぶつ者しや

佐 藤 春 夫

念佛ねんぶつの行ぎやうといふのは、つまり絶對無限ぜつたいむげんの光明くわうめいに對する歸依きゐと道みちの先達せんだつに對する服從ふくじやうの喜びから生ずる力ちからを求めもとめる心に外ほかならぬものと考へられる。果してこのとほりで間違まちがひないとすれば、前線ぜんせんに於ける皇軍くわうぐんの將士しやうしの心こゝろと自らに相通あがつするものがあるやうに感ぜられる。



皇軍くわうぐんの將士しやうしの威力ゐりきは、絶對無限ぜつたいむげんの光明くわうめいたるすめらみいつに對する歸依きゐと上官じやうかんに對する服從ふくじやうに生死せいじを托たくしてゐるからである。銃後じゅうごをして念佛ねんぶつの眞諦しんたいを得しめよ、ここに興國こうこくの氣きが漲あふつてゐるからである。滅私奉公めつしほうこうの標語ひょうごも亦念佛行者ねんぶつぎやうじやの心こゝろを心こゝろとする所以ゆゑんであらう。念佛ねんぶつの業げふは積極せききよく的な生き方で、決して老衰らうすい者しやだけの事こととすべきものでない理由りゆうをひろく説明せつめいしたいと思ふが、説明せつめいしてわからせる類るいのものではないらしい。理窟りくつなしにまづ念佛ねんぶつを試みさへすればその心理しんりは自然しぜんと得られる



であらう。前線に送られた日本人が格別の理窟なしに忠勇な戦士となつてゐる如くである。理窟によつてでなければ行動出来なくなつてゐるのは近代人の不幸である。知識階級の無力がここに起因してゐる。行動と一緒に生れる道理でなければただの空論に終る。机上の空論を組み立てて置いて、それによつてはじめて行動を起して空論の間違ひを發見するぐらゐが關の山である。知行一致、行によつて學び得る方が知も行も確實であらう。

念佛には格別に何の理窟もない。ただやりさへすればいい。その有難みは行つてゐるうちに次第に判つて來るのである。

前線の愛國者と銃後の念佛者と共に、自分は興國の日本を見たい。前線では申し分なくこれが見られるが銃後のはまだ十分とは言へまい。奮起を促さうとする理由である。

(上掲寫眞は「八甲田山の樹氷群」塚本關治氏撮影)

☆ 法然上人の家系を聴く座談會 ☆

法然上人と立石家

中村「誕生寺の御住職は現に漆間と名のつてゐますが、あれは御維新の時からなんで御座いますうな」

立石「それで御座います。入山だけは以前から私の家からやつてをります。私のところ（津山市）から誕生寺まで三里半ある、そこを行列を作つて練つて行きます。」

中村「翼賛（法然上人行狀繪圖翼賛）を見ると菅原、漆間、海と云ふ三つの豪族があると書いてあります」

立石「菅原の家は今有本と名乗つてゐる家がそれではないかと思ふのです。……海といふのは知りませんね。古老にでも聞いたらば解るでせうか。」

佐藤「立石家の系圖は餘程古いところまで解つてゐますか」

立石「系圖はずつと神代の時代までありますが確かなところはまあ千年位前からでせうか。然し古いところで間違ひのないものと云へば戦國時代の感狀以外にはない様です。その感狀は豊臣秀吉が毛利、小早川を攻めた時代のもので、私共の家は毛利方になつてゐまして、その當時の

……出席者……

立石 鉸一氏

大同生命庶務課長 大鹽 一見氏

鴻池信託東京支店長代理 加藤 徳衛氏

本會鶴見區支部主任 森本 祐顯氏

美容大學院主 橋本 樂榮氏

貞恭婦人會 高瀬 磯氏

本會 側 中村 辨康氏

佐藤 賢順氏

記者

十二月十日南品川願行寺に於て

ものです私の家の系圖に就いては、作陽誌といふ郷土の歴史に出てゐますし、亡くなられた沼田頼輔博士が同郷の關係から、漆間立石家の興亡記を書いてをられますが、先祖は九州の宇佐入幡の神官であつたのが、千年も前に美作へ移つてきたのです。」

佐藤「上人の家系は讀者が皆知りたがつてゐることなので」

立石「それでは今度沼田さんの本などお目にかけませう」

中村「今の誕生寺の所で、法然上人は誕生なさつたと云ふ譯で御座いませう」

立石「左様、稻岡と云ふところで、勅修御傳では、法然上人のお母さんが向ふへ行つたと云ふことになつてゐますが、私共の系圖では、弟が分れて稻岡に養

子に行つた様になつてゐる、それで分家になつてゐまして、その分家がつまり法然上人で絶えてゐるわけですね、私の家は分家はごく少ないので、中の家といつて分家は一軒あつたきりです。古いことは私の今のうろ憶えの記憶で誤りがあるといけませんから、御發表になるのでしたら、今度私共の系圖を御覽に入れませう。」

佐藤「立石さんの其の御紋を拜見すると大變なつかしい氣がしますが、外には餘りない御紋でせうね。いつかのお話では魚陽と書くのださうですが、私共の宗旨では杏葉と書いてゐます」

立石「沼田さんの紋章學でも魚陽といふ字が用ひてありまして、紋帳などに假名で書く時は訛つてげようなど、書いてあります

す。私の郷里の氏神の紋所が丸に魚陽の紋を用ひてゐます。(延喜)式内神社ですから、随分古いお宮ですが……」

中村「その慈は何本が本當ですか。」

立石「これは七本ですが、五本のも、十本のも十一本のもあります。幕ですとか提灯ですとかの控へ紋は丸に二本の紋を使つてゐます。」

佐藤「立石家の御墓所はどこにおありますか。」

立石「龍澤寺といつて眞言宗のお寺です。漆間立石の二つの姓があつたのですね。明治になつてから二つでは面倒なので、易しい立石の方だけを用ふるやうになりました。」

佐藤「立石さんの御祖父様がキリスト教にお入りになつたのはどんな動機からだつたのでせうか。」

立石「それが面白いのですよ。私の祖父と云ふのは、岡山に綾部の殿様の飛び地がありまして、その小野と云ふ舊家から養子に參つたもので、大酒飲みで御座いました上に、政治が好きでした。明治十八年頃から勸戒判事と云ふのを岡山でやつてをりましたが、その當時自分の扱つてをつた裁判上の事件が酒の上から起つた事件が非常に多いのです。自分が大酒飲みであるところへもつて來て起つて來る事件が酒の上の事件が多いときてゐるので、この點は自分でも随分惱みであつたらしいのです。」

淨土教とキリスト教

するとその當時安部磯雄さんが岡山に來られてキリスト教を布教してをられた、祖父の甥に當る河本某と云ふ人が、僅か十九歳位でしたが、安部さんを大變崇拜して、叔父さんに相談に來る。「キリスト教に入り度いがどうだらうか」と云ふ譯です。

「まあやつて見ろ」と云ふので、甥はキリスト教の信者になりました。だんだんやつてゐる中にその甥の人間がすっかり變つて良くなつて來る。そこで今度は甥が叔父さんのところへ來て、是非キリスト教へ入れと云つて來る様になつたので、自分でも感ずるところがあつたと見えて、それから安部さんのところへ逢ひに行きました。そして話し合つた上、一度酒を止めてからまた來ます、と云つてそれで

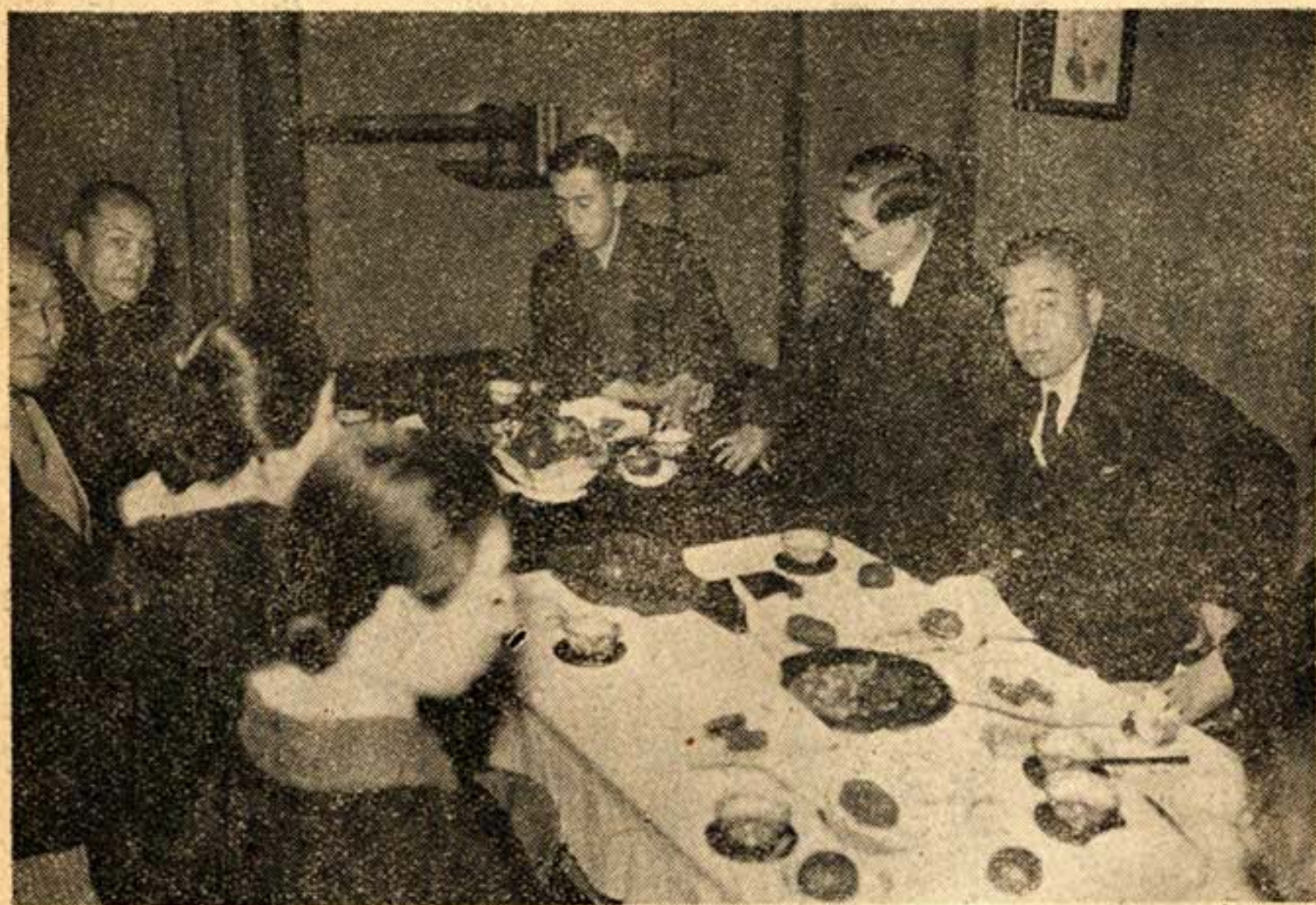
一遍ですつかり酒をやめてしまつて、キリスト教に入つたのです。佐藤「それは良いお話ですね。安部さんの方がずつと年が若かつたのでせうね」

立石「で、第一回の國會から代議士に出て田川大吉郎、中島信行湯淺、高木正年、田中正介なぞと議員の中で特殊なグループを作つてをり代議士には四回程なつたやうですが、自分は英語を知らんで代議士になつたのは残念だと云ふ理由で、代議士をやめてしまひました。當時は英國々會の議事録を讀むとか、その他英語を知つてゐることの必要が多かつたのでせう。それには面白い話があります。私が小さい時、齒が一本やい齒のやうに出てきたのを、祖父は大變心配して、齒が悪いと英語の發音がよく出來ないといふので、やかましく言つて自分でその齒を毎日ひもで結いてくれるのです。それで御覽の通りの齒ならびになりました。代議士を止めてからは縣會議長を卅年以上もやつてゐましたし、盛んに傳道をして歩いたのでキリスト教の仲間では立石と云へば知らないものはない位です。弘化四年に生れたのですが、昭和四年に八十四でなくなりました。

それで、最後まで聖書を勉強しておりまして、毎日家中、女中まで全部集めて聖書の講義をやつてゐました。そして結局死んであとは天國へ行かねばならんと云ふことを考へてゐました。非常に熱烈な信仰を持つてゐまして、法然上人でもいま生きてゐたらキリスト教を信じた

であらう。死んで天國に行くと云ふことゝ、淨土に參ると云ふことは結局同じことである。私がキリスト教を信じたからと云つて、決して法然上人に相濟んとは思つてゐないと云つてゐました。さう云ふ環境の下に育つたもので私は卅過ぎるまで酒も煙草もやりませんでした。

私が佛教に入るやうになりましたのは坂田良弘さんの感化によるのですが、坂田さんのお仰つたことゝ、私が卅年間祖父から聞いて來たことがすっかり同じなので大いに感じたことがあります。坂田さんが先頃御病氣の時「自分が今まで淨土宗の爲に爲して來たことは實に微々たるものである、これでは元祖様に相すまん」と云はれましたが、祖父も死ぬ時にかう云ふん



氏瀨高氏本森・氏村中リヨ上側左・氏鹽大・氏藤加・氏石立リヨ上側右——明説眞寫

ですな。「自分は決して生きたいとは思つてゐない。然し自分はキリスト教のために大いに盡して來たつもりでゐたが、振かへつて見ればして來たことは微々たるものである。だから、キリスト教のためにもつと生きのびて盡したい」と云ふのです。そつくり同じなのです。」

日本の佛教

佐藤「天國に生れるとか、極樂に往生するとかいふことだけを卒直に正面に出してゆくことは大切なことなのですが、それが少なくなりましたね。かういふ非常時には何だか個人的な目的といふふうに誤解されやしないかといふ遠慮もあるのでせうが」
中村「法然上人の佛教こそ本當の日本佛教でせう。法然上人には

傳承がない。純粹に日本人の獨創ですから。日本人は元來ごくしたもののより、あつさりしたものが好きですから、端的に結論をぶつけてしまふやり方が良いのですな。今佐藤さんの云はれた思想も、明治になつてから、あまり表面に出なくなりました。藤原時代が現世主義の時代で、それから戦亂時代を経て法然上人の未來主義になつて、それがまた明治の時代になつて逆轉して現在主義になつて來た譯でせう。勿論、現在を忘れても未來を忘れてもいけないので、法然上人も根本の思想はそういうのです。また往生主義と云ふと、非常に消極的のやうに考へられてゐますが、往生主義は社會の大生命の中に飛込むで、その中で自分を生かして行くと

云ふことを意味してゐるので非常に積極的なのです。」

往生主義の積極性

佐藤「大鹽さん、何か淨土教について御考へになつたことがありますましたら」

大鹽「私は日蓮宗に就いては少しばかり、研究と云ふ程ではありませんが、本も讀んだことがありますので、少しは解りかけてゐましたが、他の方には入りこんだことがありますので」

立石「私なぞも、さつき申し上げたやうなわけで子供の時分から佛教的空氣と云ふものを全く知らずに育つて來たので佛教の行事も知らず、説教も聞いたことがないので、佛教に就いての概念がまるつきりないのです。それでですから一度順序だつたお話を伺ひ度いと思ふのです。」

加藤「私は往生主義は社會の中へ飛込むものだ」と云ふことを聞いて佛教が積極的なものだと思ふことが解りましたが、今迄は佛教と云ふものは非常に個人的なもので、社會的なものだと考へてゐませんでした。」

中村「佛教では生命（ほんたうに生きる）ことと云ふことが中心なことです、個在的な考へですと、個人が生きていることのみを考へるやうになります。然し個人が生

きるのは社會の中でのみ本當に生きていることが出来るのです。淨土教——これは善導大師が支那で樹立された教ですが、元來阿彌陀とは無量壽、無量光と云ふことになるのです。善導大師はそのうち光の方を強調されたので、非常に詠嘆的、藝術的にな

つてゐます。禮讃と云ふ一種の讚美歌も、そんな譯で出來て來ました。

然し、法然上人は無量壽を重く見て生命と云ふものを新しく發見した。元來佛とは覺者（菩提を得た人）のことで覺とはさとりとも、めざめるとも、おぼえると云ふのは知ると云ふことや、知つたことをしまつておくことと云ふやうなことを意味するだけで、のびて行く、發展すると云ふ意味がありません。そう云ふ點から見ると、この覺はめざめると讀むのが本當で、研究すると云ふこと、それを着々と實行すると云ふ意味が含まれてゐますから、さめると讀むのが本當です。

個人はそれが社會的にならなければならぬのです。個人の肉體でも細胞が本當に生きるには身體全體が生きてゐなければならぬ。國家に於いても、日本全體を生かして行くこと、天地全體、宇宙全體を生かして行くことによつて始めて個人の生命が本當に生きて行くことが出来るのです。かう云ふことにめざめた人を菩薩と云ひます。釋尊はさう云ふ風に生きて來た人です。これは佛であります。

この生命を新らしく發見せられたところに法然上人の淨土教の大きな意味があります。法然上人が日本佛教の創始者だといふのもかういふ意味からです。ではどうすればさう云ふ様に生きていることが出来るか、この方法が法です。で、佛と法とを實

行するものが僧（僧伽）でありまして、僧とは僧侶のことではなくて、一つの集團のことで、本當に仲良く纏つてゐるものが僧なのです。

この佛法僧の三寶が佛教の基本的なもので、その中どれを中心にするかで佛教の宗派が分れてゐるのです。法然上人の宗教は結局いのちに主體を置いて、同じ南無佛でも無量壽佛に合唱せられたものです。日蓮宗などは南無法の方ですな。

そんな譯で宗派は互に争ふものではなく、各々の角度に於いて日本全體を本當に良く生かして行くと云ふことでなくてはいいけませんね、日本と云ふ大きな僧伽を現はして行くと云ふ立場に立たなくては。それには個々の生命が誰れも彼れも全體によ

くなつて行かなければならぬ。それが佛教の使命です。聖德太子も「篤く三寶を敬へ、三寶とは佛と法と僧なり、即ち四生の終歸、萬國の極宗なり云々と云はれてゐます。」

一 即 多

加藤「この前の座談會の時に問題になつた全體主義はどうでせう。僧伽と協同體と大變似てゐるやうに思ひますが」

佐藤「シュパンの全體主義にしても個體と云ふ考へが非常に強いでせう」

加藤「西洋人の全體主義と云ふのは個人主義に對抗した全體主義で一即多と云ふやうなところまではなかなか行かない。」

中村「西洋人には一即多と云ふやうな思想はないですね、従つて

抱擁力がない。」

加藤「言葉でも即と云ふやうな言葉がない。〇」と云ふ言葉があるが或ひは云ふ意味にも、なりますからね」

佐藤「日本の全體主義は本當のところはやはり佛教で行かなければいけないのでせう」

高瀬「お話は違ひますが、自力と他力のことですが眞宗では淨土

宗は半分自力で半分他力だなどと言つてゐますが、如何でせう。」

中村「自力他力なんて相對的なことですよ。」

佐藤「それと關聯して惡人往生の問題などがありますが、今晚は遅くなりましたから、この位に致しませう」

慰問 寄附者芳名（敬稱略）

十一月十二日ヨリ十二月一日マデ
一圓 愛媛縣砥部町 石津 延亮
一圓 釧路市米町 福山 仙太郎
五圓 三河教區刈谷組 淨土宗 一同
一圓 東京市王子區王子 小松 一
十圓 滿州國海城縣十二區分水站 高陽街 成清 信一
五圓 〃 〃 近藤 忠衛
五圓 〃 〃 戸田 積苗
一圓 臺北市築地町 野呂 たけ
一圓 京都嵯峨組 清源 寺

十圓 宇治山田市中之町

寂照寺婦人會

白衣の勇士にこの法味をお捧げ下さい。一口一圓で、立派な御奉公の出來る譯です。戦ひ傷いて故山の療養所にある、戦傷病兵は、單なる一時的な娛樂慰問だけでは眞の満足と與へえられぬであります。是非とも護國の勇士等に信仰の法悦を捧げたいと念願致します

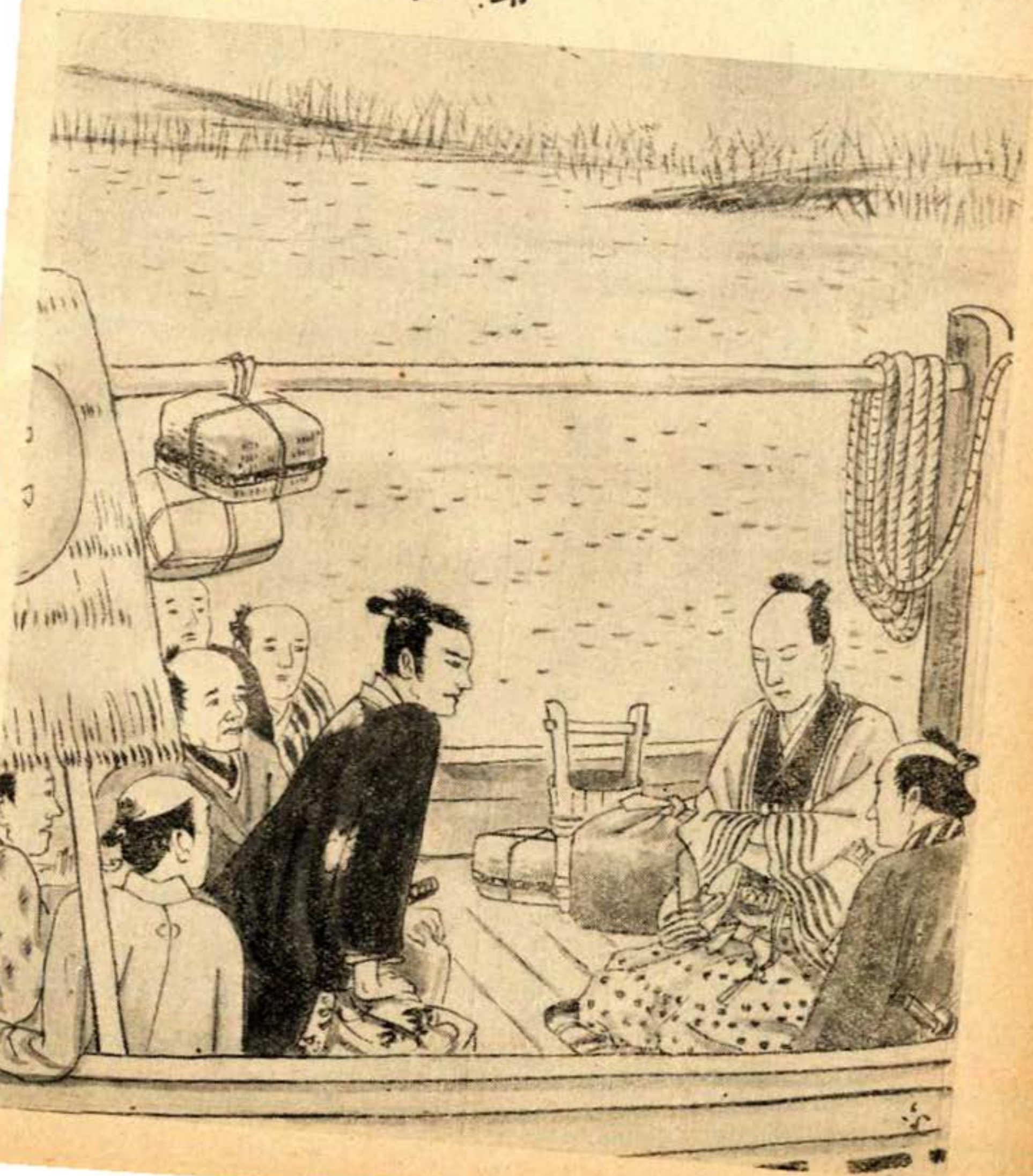
送り先

東京芝區芝公園淨土宗事務所財務部

慰問淨土係
（振替口座東京一五、一一一）

討^{うち}拔^{ぬき}の禪^{ぜん}劍^{けん} 小説

三 健 島 小
畫 平 金 木 鈴



起きろ浪人

お正月を城下で迎へようといふ人々で、乗合船は満員であつた。

乗合船といつても、そこらにある川の兩岸をつなぐ小舟ではない。出羽の國子吉川十八里を航行する乗合船である。

その乗合船が、いつばいの人だつた。

もう、どこにも客を乗せる餘地がないほどである。

『と……船頭、待つてくれ』

いま出帆といふ間ぎわに飛んで來た浪人風の侍が、ガタ／＼／＼高足駄で渡し板を踏み鳴らして來る。

『もう……客止めで……次の舟にしておくんなさい』

『いや、この船でなけやア用が足りねえ』

ひどくぞんざいな口の利き様に、客は振かへつて浪人を見た。破れた合羽に身をつゝんで、酒やけのした顔は、陰惨なかげを現はしてゐる。

『でも……』

船頭は、當惑して浪人を斷らうとしたが、その暇を與へずに飛び込んでしまつた。

仕方なしに船頭は、渡し板を引くと、船は靜かに滑りだした。

今年は、何十年振りの雪のない年だといふが、もう遠近の山々は、まつ白な雪を被つて、そこから吹き亂される風は、荊のやうな鋭さを

含んでゐた。

『おう——あそこア空いてるのか？』

さつきの浪人は、じろ／＼船中を見廻してゐたが、若黨をつれた立派なお武家を見ると、船頭にさう聲をかけた。

樹の目のやうに區切りをしてある。どこもかしこも客が詰つてゐるのに、このお武家の座席だけは二人切りで空いてゐた。

『もう賣つてありますんで……』

『何にッ賣つた。でも、あんなに空いてるぢやないか？』

面倒だと見たか船頭は、

『お客さんに話し合つて、入れて貰つたらどうです。私の方は賣つたもんですから、どうにもなりません』

『うむ……』

と、生唾を呑んで、うなづいた浪人、ち／＼とお武家の紋所や年の格好を探つてゐたが、客の頭を飛び越して、近づいて行つた。熟柿のやうな酒の臭ひを残して、ひどく亂暴な仕草である。

『おう！ こゝに入れて貰ふぜ』

さう云つて、どつかと二人の中に割込んで胡坐をかいた。

客は、思はず『あつ！』と、叫んだ。何んといふ無法な浪人であらう。屹度、斬合ひがはじまるに違ひない。

一同は、さう思つた。

しかし、相手のお武家は怒らなかつた。腕をくんで、靜かに眼をつ

むつてしまつた。

「へ……この頃の六郷藩の奴ら、カラ意氣地がねえ。立派な面アシやアがつて、兩刀は飾りもんか。は、は……」

圖に乗つた浪人、高々と嘲笑し、腰の貧乏徳利をぬいて、頭のとつべんで振つたが、コトとも音がなない。酒が切れてゐる。

「ちえッー」

と、舌打をして、ドンと放り投げたが、そばの蒔繪の酒樽を見ると、

「これア、いゝ物が見ツかつた。どれ……」

ごくぐくとラツパ飲みをはじめた。

見てゐた一同、あまりの亂暴さに義憤を感じずにはゐられなかつた。

と、同時に、武士の體面を汚されながら、眼をつむつて黙してゐる

お武家に對して人々は、輕侮と齒痒さを感じた。

馬鹿か、臆病か、さもなくば、かなはぬ迄も相手に一太刀なりと恨

む筈だ。いや、さうでもないことには、武士の體面が立たぬ。

一同は、口惜しさのあまりさう思つた。

お武家は、造りつけの人形のやうに腕ぐみをして動かない。

實は、このお正月新妻を迎へるために城下へ行く、早阪佐内であつ

た。彼の役は、藩境館頭である。

その才幹を主君六郷兵庫守に見出されて、藩境館に赴任したのは、

つい昨年。こんど、六郷小町といはれ評判の美人小千代との縁談がま

とまつて、躍る心で船に乗つたのであつた。

出来ることなら穩便にすましたい。

佐内は、奥齒を嚙んで、ぢーツと耐へつゞけた。

——と、この浪人、何んの恨みがあるのか？

「ふッふ……抜けぬか。抜けぬと見えるのう。智慧ほどに刀は斬れぬと見える」

重箱から酒の肴を摘んで頬張りながらの惡口である。

若黨は、ばり／＼齒がみをして口惜しがつた。しかし、主人の佐内

は、身動き一つしない六郷藩で、「智慧早阪」といふ綽名をとつた佐内である。

いま、浪人が吐いた「智慧ほどに刀は斬れぬ」といふ言葉に、佐内

は、カッ！と眼を開いた。何か心に期するところがあるらしい。

浪人は、樹いつばいに大の字に寝てゐる。

佐内は、立ちあがりさま、どーんと肩を蹴つた。

「起きろッ浪人——」

咄嗟に叫んだ佐内の聲に、人々は弾かれたやうに、頭をあげた。

淨　　め　　酒

これは浪人にとつても、まったく不意に違ひなかつた。

その證據に、刀を取る隙さへもなく、

「無禮者！」

つゞけさまに叫んだ佐内の聲と同時に、ガラッ！と不吉なものが光



つて、ダツと肩さき深く浪人は斬つけられた。

『う……汝——』

と、血を吐くやうな聲とともに、ザアと血しぶき立て、浪人はのめつて行つた。

佐内は、悠々と刀の血をぬぐつて鞘に納めた。

それから、靜かに船頭を呼んで、

『船を岸につけてくれ、それから、この船で人を斬つた場合、どういふ掟になつてをるか？』

『は、はい。そ、その掟は、ござりませぬ』

あまりの突發事件に、船頭の五體は、わな／＼と顫へてゐる。

『さうか、それでは、この死體を流しても異存はないな』

『は、はア』

佐内は、浪人の死體を船から川へ投げた。

一糸も亂さぬ沈着いた舉動に、人々はたゞ茫然と見つめてゐるばかりである。

船は、靜かに岸につけられた。

佐内は、若黨に何やら耳打をして、さきに陸へあげた。若黨は、後をも見ずに、駈けて行く。

それを、ち／＼と見送つた佐内、靜かに視線を船内にうつして、『見られる通り無禮討にした。何んのか、わりもない方々に、船を止めて申譯なかつた。拙者は、こゝから陸路を城下まで歸る。それで容

して貰ひたい』

水のやうに沈着いた聲で云ひ終つた時、若黨は、二頭の馬を近くの百姓からゆづり受けて引いて來た。

そして、その二頭の馬の背に荷物を、つけ終ると、

『船頭、船を汚して濟まなかつた。少ないが、この金で船を洗ひ、淨め酒を買つて、皆さんにも飲んでいたゞくように……』

佐内は、五兩の金を船頭に渡すと、悠々と船を降りた。

『お武家さま……こんなことをして戴かなくつても……』

『後の事は、何分にも頼んだぞ……』

振かへつて云つた佐内の顔いろは、いつもと少しも變らなかつた。

名君兵庫守

六郷の城も城下も、この噂でもち切りだつた。

『偉い。何んとしても、智慧早阪でなければ出来ない事ぢや』

『狼のやうな浪人と渡り合つて怪我をするだけ損だ。それを、相手

の處を狙つて、抜討に斬つたのは大した度膽ぢや』

『しかし、早阪は倅せ者ぢやのう。小千代殿とは婚禮をするし、婚禮

早々、浪蕪者を斬つた處置よろしきを得たといふので百石の御加増……拙者も、早阪にあやかりたいのう。は、は……』

寄ると、さわると早阪の噂であつた。

六郷兵庫守は、奥羽二十五藩中屈指の名君である。

その名君が、早阪佐内を侍頭に拔擢した。

いまは、屋敷を賜り、小千代と夫婦になつて、人の羨む生活をつづけてゐた。

梅の花が、侍屋敷の生垣のうへで、チラホラと咲き初めた。

兵庫守は、劍道指南の後藤柳之介を相手に將棋をたゝかはしてゐた。

『主君は、早阪佐内の噂をご存知ございますか？』

『……』

弓、鐵砲、柔術、馬、その他の指南役を一人づゝ呼んでは、將棋をたゝかはしながら、その方面の事を聞くのが、兵庫守の何よりの愉みにしてゐる。

その席で、他人の噂をしてはならないと固く斷つてある。

それなのに後藤柳之介、

『まったく早阪は、武道から申して卑怯この上もござりませぬ』

『よせ……他人の噂をしてはならぬ』

鐵面を讀みながら、兵庫介は、抑へるやうに云つた。

『いゝえ、これを申さずにゐられませぬ。何故、武士なら武士らしく、尋常に相手に刀を抜かせて勝負をいたしませぬ。それを、寝た者を蹴

つて、斬りつけるとは、畢竟、己が腕に自信がなく、卑怯だからです』

『これ！ よせと申すに……』

『それを、主君には百石の御加増になり……それでは、眞の武士道と

いふものが、くもります……」

『えゝつ、見苦しい……聞く耳持たぬわい』

兵庫守、いつになく血相をかへて、立ちあがつた。

その後姿を見送つた柳之介、

『ふゝゝゝゝゝ』

肩を小さきさみに顫はせながら、憎惡の眼でいつまでも、その後を睨めつけてゐた。

あすからは浪人

その翌朝、後藤柳之介に罷免の御沙汰があつた。

と、同時に、後藤柳之介から、早阪佐内に果狀が届けられた。

文面は、いたつて簡單で、卑怯者に、眞の武道を見せてやりたいから、幾人なりと助太刀の者をつれて来い。と、あつた。

だが、後藤柳之介は、劍道を賣



る渡り者であつた。

『二萬二十一石の吹けば飛ぶやうなこんな所に、いつまでゐるものか……』

召抱へられる時から一時の腰かけにやつて來た。

ところが、六郷小町の小千代を見て、彼の心は變つた。小千代と一緒にになれるなら、この土地に生活してもよいと思ふやうになつた。

そして、結婚を申込んだのである。

ところが、既にその時は、早阪佐内との婚約がなり立つてゐた。

後藤の心は煮線かへるやうであつた。

そこで、奸計をめぐらしたのは、浪人を使つて歸還する佐内に恥辱を與へ、佐内の惡評を轟きたてゝ、小千代との婚約を破談にしようとした。

思つた。

だが、見事に裏を掻かれて、却つて早飯の評判を高めることになつた。

このうへは、行きがけの駄賃に、死人の山を築き、小千代や兵庫守に腹癪せをしより決心である。

小千代は、良人が讀みすてた果狀を見た時、眼のまへがまつ暗になつたやうな氣がした。

相手は、何んと云つても、自源流の達人後藤柳之介である。どう考へても勝味がない。

『あの……果狀に、どう御返事を出しまして?』

いつもに變らぬ佐内の態度に、小千代は訝りながら訊いた。

『果狀……そちも讀んだか?』

『はい』

『確に承知したと返事をだした。』

『まア!』

小千代は、身を反して佐内の顔を見た。

『助太刀の者を幾人おつれになります?』

それなら、今からすぐに實家に歸り、助太刀の相談を父にしようと思つた。

『いや、わし一人の方がいゝ』

『いゝえ、いけません。それは、それは、いけません』

小千代は、膝をすべらして、佐内の前に兩手を突いた。

『いゝから……わしにまかして置けッ! だが、あすからは浪人ぢや』
いつになく良人のけわしい顔に、小千代の體は、硬ばつて、何んにも云へなかつた。

旅 の 僧

果狀に指定されたとほり、台泉寺山の調練場へ出かけて行つたのは、約束の時刻より少々佐内は遅れてゐた。

『助太刀を狩りあつめるので、暇どろと見える。五人かな、いや、小千代の實家から手を廻せば、十七八人は狩だせよう。十七八人も斬すて、逃げたら、兵庫守さぞかし口惜がらうて……』

柳之介、小千代やその他の人々の顔を描きだし復讐の心を燃した。そこへ、悠々と佐内は顔をだした。

何んの仕度もしてゐない。もつとも、こつちは、直ぐその足で立ち退くので旅仕度をしてゐるが、佐内は、袴もつけず着流しである。

『助太刀は?』

『いや、助太刀はいらぬ』

『何にツ? 貴様一人かッ』

『わし一人だ』

『死ぬ覺悟でやつて來たかッ……』

『いや……』

『斬られる決心で来たかと訊いてゐるのだ』

『斬るつもりでやつて来た』

『何にッ！ 拙者をか……ふ……仕度をしろ』

何んといふ無暴者であらう。相手にするほどの事はないと思ひながら、その突飛さに柳之介は、まさに虚をつかれた感じであつた。

彼は、刀の下げ緒を襟にしうとした瞬間キラツと閃いた紫電と同じ時に、

『えい！ つ』

烈帛の氣合を食つて、

『ま、まてッ！』

と絶叫した。が、その一瞬に、くら／＼と眩惑を感じて、左手が熟鐵を浴びたやうな疼痛を覺えた。

『う……汝ッ！』

叫びざま、右手を刀の柄にかけた時、風を巻き起すやうな佐内の第二の太刀を肩にうけて、

『う……』

と、呻きながら、二三步踰けて、のけぞつて倒れた。

佐内は、その日のうちに、後藤柳之介を斬つた旨を、先方の果狀に添へて奉行所へ届け出た。無論罷免は覺悟のまへであつた。

ところが、藩主直々のお呼びだしに、佐内は驚いて登城した。

兵庫守は、奥書院で書見をしてゐたが、靜かに顔をあげて、

『後藤柳之介を斬つたさうぢやのう』

『果狀をうけまして届出もせず私闘をいたしました罪、お詫びの申上げよりもござりませぬ』

『そちは、どうして腕達者の後藤を斬つた？』

『はい、心で斬りました』

『何に！ 心とな？』

『はつ、實は藩境館にて、旅の僧より劍禪の教へをうけました。いかに、劍の術ばかりが出来ても、心の修行を積ねば、猿の物真似に等しいことを悟り、旅の僧について、一意専心劍と禪とを學びましたところ、機先を制して劍禪の拔討なるものを工夫いたしました。相手の虚を突いて敵を制する。相手より一歩先じて倒す。これをもつてすれば、いかに後藤柳之介殿が自源流の達人でも、勝てぬまでも相討になる覺悟でゐましたところ、捨身の劍法が後藤殿に勝つたと思はれます』

『うむ……』兵庫守は、力強くうなづいた。

『なれど、同じ藩の者を殺害いたしました罪法規どほり御處分のほど願ひ申します』

『そちは罷免される覺悟であらうが、後藤は既にわが藩の者ではない。きのふ罷免したばかりぢや。だが、今後、私闘はならぬぞ。叱り置く』

さう云つた兵庫守の顔には、明るい頬笑みが泛んでゐた。(終)

萬 人 の 救 ひ

岡 本 か の 子

むかしから、この地球上で、随分難かしい學說や思想が立てられて來ました。しかし、結局は、それを應用して私たちの日常生活の糧にしなければ全然無かつたのと同じであります。いくらでも立てられるからといつて無暗に難解の說を立て、その儘にしてゐたらそれは道樂に過ぎないばかりでなく、時とすると思はぬ人々をその說の中に迷ひ込まして抜き差しならぬ破目に陥れることがあります。

學說や思想を立てる以上、それを一般の人々にも了解出来るやうにし、出來たら日用の役にも立たせるまでに努めなければ無責任のそしりを受けませう。

だが、茲に高遠な思想とか精密な學說とかを平易にくだいて私たちの日常にまで持つて來るのは容易な業ではないといふことを知ります。それには非常な苦心が要るのでございます。

自然科学の方でも地球の引力説が假定されて、それから順次、速力とか釣合ひとか、いろ／＼の力學が成り立ち、その後随分苦心を拂つて文明の利器の製造に應用されたのでございました。最近では引力説も修正が加へられたり、相對性原理とか電子論とか、量子學とか細密深玄な方面に正確を期する研究も續けられ、その成果は物の觀方、天體の觀測、物質の轉換とか識別とかに徐々に應用されつゝあります。而かもこの原理が一般に應用されるやうにするまでには非常な努力が拂はれつゝありまして、原理を更に確かめ、それを非常な苦心によつて過またずに普遍化し、私どもの日常生活にまで持つて來るのでございます。これが一步、過ぎると、まるつきり實際の役に立たなかつたり、反對に有害なものになつたりします。例へば電氣の應用などでも一つ間違へば人を害するやうになつてしまひ



ませう。

栄養學の方面でも、既に早くから新鮮な食品の中には、人間を元氣づける活力素とも言ふべき物質が含まれてゐるらしいといふ説が立てられてゐました。しかし、それぢや新鮮なものでさへあれば何を食べても充分かと言ひますと、ものによつては全く活力素がないやうだつたり、料理の仕方により駄目になつたりして、全く得態が知れずに一時、混沌としてしまつたのでした。それが、本當に實體が抽出され、而もその實體にはいろいろの種類の効能がありビタミンA・B・C・D……といふやうに詳しく分類されるやうになつて漸く目鼻がつき、更に進んで私たちの毎日の食膳に上る卵にビタミンA B Cがあり、トマトにはビタミンB C、牛乳やバターにはビタミンAばかり、大豆や胚芽米にはビタミンB、キャベツや大根や玉葱や夏蜜柑にはビタミンCがあるといふこと、それからまた案外に干海苔や干物にビタミンがあることなど、はつきり識別して私たちの栄養に完全が期せられるまでの努力といふものは並大抵のものではありませんでした。

この事實から溯つて考へましても、法然上人様が、御一代のうちに、あんなにも確定的に萬人に通ずる易行門をお立てになつた御苦心といふものは大變なものであつたらうと推察致します。

法然上人様以前は、随分難かしい行や研究があり、複雑深玄な佛教の理が立てられ、それを基として安心立命を得やうと人々は努めたのでございました。しかし、そのやうな難かしいものを一般の生活に忙がしい平俗の者が容易に了解出来る筈がないのは理の當然であります。

一たび、法然上人が出でられて、御自分の経験から、この無理を熟知せられ、遂に悟り出された「南無阿彌陀佛」の唱名だけで絶対の淨土世界に到達させられるといふことを卒直に而も確實に大衆に向つて宣言されて以來、こゝに七百有餘年、何百萬、とも何千萬とも知れぬ大衆が、實に容易に而も立派に救はれて來たといふことは、たゞ／＼その廣大無邊の恩に感泣するばかりでございます。

先日、或る佛教學者の一人に會つて、一般佛教専門家の宗旨の好尚に就て話すのを聴きました。若いうちは大抵、種々様々な學理の研究や深玄な教理を好んで、その方面に入つて行きますが、しかし最後には、なか／＼人間の非力の及び難いことを知り、人間性に根ざした簡易で慈悲の信仰の方に入つてしまふのが多い、といふ話でありました。私もそれを尤もな話と思ひます。

醫者でも成り立てのうちは、自分の學び覺えた科學の力で、どんな病人でも立ちどころに治さうと努力するさうですが、暫らく實際の治療に當つてみると、なか／＼科學だけでは片付けられない場合が多いさうであります。

それで經驗を経るに従つて、無理な努力は止めて、病人の體の自然の恢復力とか時間の經過をも重要視するやうになり、その自然の恢復力に科學の力を順調に介添へして、間接的に病の治るのを待つといふ風にまで達觀して來ると一人前の醫者と言へるさうでございます。

このことは人間界の一小範圍のことではありますが、此の宇宙の根本生命たる阿彌陀佛に歸依して、その救済向上の力に救ひ取つて貰ふ淨土宗の原理に似通つてゐるやうにも思はれます。結局、我武者羅なものがき方や一人好がりは末通らないといふことになりませう。

殊に近頃のやうに非常時の折柄、新東亞の建設に着手しました私たち日本民族の將來といふものは、今まで安閑として過して來たときと違ひまして、非常な負擔が重なつて來てゐます。この世に於てたゞ漫然と甘美な天國が得られるなぞと夢想し、渴仰してゐた夢もつく／＼醒めたこととございませう。

寧ろ、長期建設の理想が實現致しますまでは苦こそこの世に生ける者が望むべき唯一の恩恵物であるとさへ考へて苦を凌い

で行かねばなりません。如何に防いだとて苦難は次から次へと振りかゝつて來るものでございますからそれに堪える身心を養つて行かねばなりません。それに就いて淨土宗のやうな安心立命が必要でございます。

一切の急務な我意を退け、一切の迷動を抑へて、唱名の單一無雜の功德により、安身立命の道をほの見させて頂き、その希望に於て、私たちに如何なる苦難にもひるまず、生きの身の勤めを盡くさせて頂くのでございます。益々時代に適應性のある宗旨であると思ふのでございます。

而も、その一見、平易に見える教理のうちに實に深遠宏大な眞理が含まれてゐながら、別にその教理を深く解剖研究しなくとも、たゞ唱名を重ねるだけで自然と、將來の身の救ひの確かであることを身にしみ／＼感ぜられるのであります。それはヴィタミン證明の難かしい理論や抽出の方法を知らなくとも、現にそのヴィタミンの含まれてゐる食品を口に入れ、ば自分の身が養はれて行くやうなもので、實に容易に救はれの道に入れるのであります。

だが、それだけに、その眞理を究め、それを一般大衆の日常用にまで持ち來らせた最初の努力者の恩を忘れては済みません。その上、その恩に酬はねばなりません。その報恩の仕方と言へば別に、いさひはないことで、折角、後人の幸福の爲めに研



究發明された眞理を信じて、その恩澤に出来るだけ自分も浴し、他の人々にも知らせて浴させればよいのであります。私たちはヴィタミンの効能とそれを含む食品を知つたなら、その食品をせつせと食べ、更に他の人々にも勧めて食べさせるがよいのであります。それは自分の爲にもなることだし、他の人々の爲めにもなり、また、それを發見した恩人の希望に叶ひ、その恩義に酬ゐることもなるのでございます。

こゝの道理を擴大して、上人様の御教へを知るならば、先づ唱名に専念し、他の人々にも説き勧め、相共に救ひの保證を受けるならば、更に上人様の御旨に副ひ奉り、報恩の萬分の一も盡させて戴けるわけであります。

南無阿彌陀佛！ 何といふ卒直な語であります。耳を傾ければ、傍の石も木も草もみな、南無阿彌陀佛と唱へてゐるではございせんか。それもその筈です。彼等とてもこの大宇宙の根本生命たる阿彌陀佛によつて支へられてゐるのでございますもの。更に耳を澄ませば、鳥獸も山海も、風火さへ、南無阿彌陀佛と唱へ續けてゐるやうでございす。

私たちも、それに和して、油斷なく、相共に救ひの道に乗り込まして頂きませう。

S.S.S.

金ペンは政府へ！
ペン先は耐久ペンに
替へませう

2 エン以上各種

ンペ酸耐ぬせ蝕腐に對絶

筆年萬・スエンサ



野志

陸軍病院を訪ふの記

本會婦人部

長田 たい子

今日は珍しく晴れて風も無く暖かな秋日和である。貞恭婦人會傷兵慰問に私はお伴させて頂いた。

病院の玄關に進入すると直ぐ目についたのは、陽當りの好い縁に二三人白衣の人が半身出して日光浴してゐたり、其向ふで藤椅子に寄つて紹指に餘念のない有様であつた。

傷つかれた人々のいたましいお姿に胸が一杯になつて、眼頭が熱くなるのを感じた。案内の方に通れられて、子供達が紙風

船と折紙を、大人が「淨土」を抱えてお部屋毎に廻れば、皆様はきちんと寢臺に坐つて迎へて下さり「有難う」と仰有つて受取つて下さつた。鍾鬼様のやうなお髪の方も有り血色の悪い方も目についた。

「お大事」といふ私の聲は咽喉につまつてでこない。くちびるがわなくふるえてしまふ。

お部屋を一廻りして廊下からみれば、今さしあげた風船を面白相に突いていらつしやる。

まあ何と無邪氣な事、と思ひ乍らふとお庭を見ればそこでも突いていらつしやる。

私達は暖かな芝生に陣取つて晝食を済ませた。それから子供達が風船を突き始めると、白衣の兵隊さん方がお仲間入りにきて下さつた。其内レコードがかゝつて、小山様のお嬢様が舞踊をお始めになつた。美しい長いお袖をひるがへし日の丸の小旗をふりかざして露營の歌をお遣りになる。

夢に出てきた父上に死んで歸

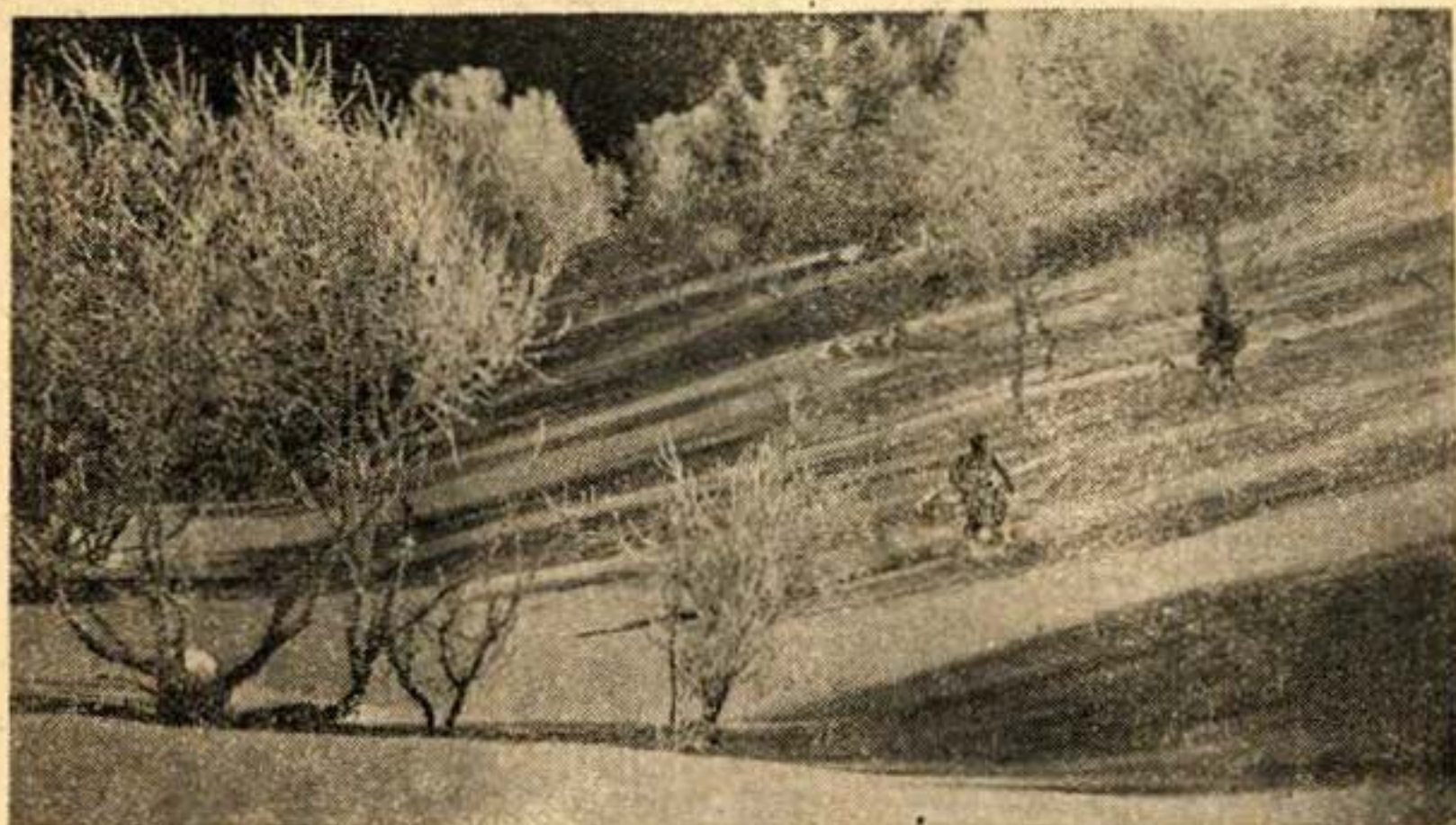
れと囀まされ 覺めてにらむは敵の空

と無念の思ひ入れにポロ／＼と思はず涙が頬を流れた。

お母様が「皆様からアンコールされたのだからもつとおどらなくちや駄目よ」

と仰有つて、それから童謡を幾つも／＼みせて下さつた。兵士の方々がカメラを持つていらつしやつて、盛んにお寫しになつた。それが機會で、すつかり打解けて仲良しになり、三人の兵隊さんが芝生に坐り込んで私共に戦争の話を聞かせて下さつた。

丸い頭の兵隊さんは、奥様もお子様もあり、去年の夏出征して加納部隊に参加し、吳淞の敵前上陸で右肩を打たれ、こうして養生する身となつたが、寒い



日は痛んでならぬと肩をおさえてをられた。(新雪、塚本間治郎)

顔の長い兵隊さんは人指ゆびを傷つかれただけで、三人の中

では一番軽い様に拜見した。この方が語られた話の中から二三拾つて見やう。北支〇〇城を占領した時、後方を敵に圍まれ籠城して一ヶ月餘、食量は盡き木ノ芽と乾パンで數日我慢してゐた。時々飛行機は見舞つてくれるが弾ばかり運んで食物は來ない。兵隊は營養不良になる、病人は出来る、すっかり元氣を失つた時友軍の救ひがきて敵を挟み打ちにして勝利を得たときは醫え

やうもないうれしさであつた。

又或日非常な激戦で戦友はばた／＼倒れる其中で一人の伍長が腹部を貫かれた。彼は赤に染まり乍ら「天皇陛下萬歳……」と五度も叫んで息絶えた。餘りにも勇しい最後、こんな立派な臨終は見た事がなかつた。部隊長が骸を葬る時「残念」だと泣かれたが我々も共に涙にむせんだ。

又或深夜であつた。非常な接戦で暗の中で自分等は盛んに機銃を打ちまくつてゐた。ふと弾の調子が變つてきた。けれど調べるひまもなく打續けてゐると夜が明けてきた。見れば側に彈の箱が山をなしてゐる。「はて不思議我隊にはこんなにある譯がない」とあたりを見ればこは如何に、支那の兵隊さんせつせと弾を運んできてくれる。敵の陣

とは氣が付かぬのだ。無論殺される事も知らずに。哀れな様でおかしくてこんな愉快な事はなかつた。

次の兵隊さんは一番年若らしく元氣な人で「君は指一本の負傷だからいゝが僕を見てくれうしろのはげを」といはれてみれば大きな傷跡が毛をそぎとつていたましく、承れば足にもあるとの事九死に一生を得た好運な勇士と聞かされた。

瓶落しの秋の日ははや暮れ近くなり、名残りはつきねど病院をおいとしました。街道には夕靄が立ちこめて、はるか紫色に平野がけむる。高粱ならぬ玉蜀黍の素枯れたすがたも戦線が偲ばれて、見ぬ黄塵の平原に思ひをはせながら満員のバスに揺られて家路に急いだ。



墓 はか を 刻 きざ む

吉田 絃二郎

わたくしが玉川に近く移り住んだころからわたくしの家に材木を運んで来てゐた少年があつた。近所の店にやとはれて働いてゐる農家の末子であるといふことであつた。

今度の戦争がはじまつて、わたくしの近所からもいろいろな人が出征し、すでに名譽の戦死を遂げた人たちもある。

何かの話の序にわたくしは、材木屋に働いてゐた少年が兵隊になつて死んだといふことを聞いた。少年だとばかり思つてゐる間に、いつの間にか青年になり、押しも押されぬ軍人となつてゐたのである。しかしそれにしても直ぐ近くにて戦死したことを知らないのは不思議だと思つてゐたら、戦死ではなく病死だといふことであつた。入隊をして間もなく練兵中にいささかの負傷をし、破傷風が因で亡くなつたといふことであつた。戦地にも行かず、戦隊で亡くなつたのである。平時ならば

ともかく、この大戦のさなかに戦場にも行かず亡くなつた青年のことを思ふと一層氣の毒である。

わたくしはその青年の家のあたりを歩いたんに、死といふ問題についていろいろなことを考へさせられる。

またその青年の家の隣りから出征した人は、漢口で名譽の戦死を遂げ、昨日悲しい無言の凱旋をした。町中の人たちが道傍に堵列して英靈を迎へた。

七十幾歳の老人は一人息子を失つて、幼い孫を相手に毎日野良に出て働いてゐるが、その尊い姿を見ると頭が下がる。

この冬は武蔵野を歩いてゐると、耕作地には若い娘たちや老人たちが眼につくやうに思はれる。その人たちの中には、同じやうにその夫、その子、兄弟を戦場に送つてゐる人たちが多くであらう。この中にはすでに悲しいたよりを受け取つた人たちが



も多いことであらう。しかも人々はつつましやかに大地を耕してゐる。その人たちの姿を見れば合掌したくもなる。

一塊の土を耕しつゝもその人たちは悲しい胸をとどろかしつゝ遠い戦場を思ひ、故人を懐つてゐるであらう。

穫り取られた一粒の小麥にも、あの人たちの悲しい思ひが潜んでゐるであらう。

「人間は悲しむために作られた」といふスコットランドの詩人の言葉をつくづく思ふ。

ミレエの繪、ミレエの農村の人々を見ればやはり同じやうな感じをあたへられる。「落穂拾ひ」、「アンゼラスの鐘」、羊追ふ娘、木を伐る男、秋の丘の木に凭る青年、尼寺の人、雁の群を眺むる農婦たち、收穫を運ぶ人、みんながこのころの武蔵野の人々に見るやうなつつましさと宿命に従順な心をささやいてゐる。

否、現在のわたくしの周圍にはバアンズやミレエが書き得なかつた程の深いもの、つつましやかなものが動いてゐる。

年は逝き、新しい年は生まれて来る。しかし何といふ嚴かな年の暮であり、新しい年であらう。

x

今日は多磨墓地へ出かけて行つた。去年の夏から依頼して、

今年の春の彼岸までには完成する約束であつたが、春が過ぎ夏になり、秋の彼岸が來ても墓は出來上らない。しかし石屋の主人といふ男がめづらしく朴々した人間なので、一切をその男にまかせてゐる。明日をも待たぬ人間の壽命といふことを考へると、一日も早く母や妻の墓を完成して置きたいが、墓が出來上つたらちよつと寂しくはないかとも思ふ。

「墓を作り上げるまでは死んではいけない」と思へば生きて行く勇氣もあたへられる。もしその墓が出來上つてしまつたら、何うしようといふやうな氣もする。

義仲寺の芭蕉翁の墓も小さい。嵯峨の去來の墓もまことに小さい。膳所の龍ヶ岡の丈艸の墓に至つては墓といふよりは小ひさな石ころといふ感じである。あのやうな小ひさな墓を見ると、まことにあはれも深く、ゆかしいものである。わたくしは墓を建てるならばできるだけ小ひさく質素なものをと考へてゐた。だから多磨墓地に墓を建てることに決めた時山から小ひさな自然石を探して來ることにした。しかし數ヶ月の後山から送られて來た自然石は決してわたくしが想像してゐたやうな石ではなかつた。と、同時にわたくしの胸には今までとちがつた考へがわいて來た。夫として亡き妻への最後の贈物としての墓であれば、すこしは大きくてもよいであらう。さういふ考へからわたくしは碑には小松石を選んで、周圍の石垣には白河を用ふる



ことにした。成るべく目立たないやうに、しかしあまり小ひさくもあはれでもないやうにと。

わたくしは多摩墓地まで出かけて行つては仕事の進捗振りを
見ることに悲しい慰めを見出すやうになつた。

わたくしは妻の母のために方鏡印塔を建てることにした。こ
れも一つは亡き妻への報恩の考からであるが。

「こない、仕事をすることはもうわたくしの一生の間には二
度とありますまい」と名人氣質の老石工はうれしさに蓮華座
の上を撫でてゐた。そして石屑を叮嚀に掃いてはわたくしに
の深さを見せたりした。

「わたくしは仕事に面白いので、朝は早出して、夜は十時ま
で働くことにしてゐますが、何うしても十時より遅くなります」
とも言つた。かれは他の石工たちからかけはなれたところに自
分一人の仕事場を仕切つて、そこでこつこつと墓石を刻んでゐ
る。

恐らく來年の春の彼岸になつてもまだ墓は出来上らないかも
知れない。たゞ一人の男がいつもこつこつと鑿を握つてゐるの
であるから。

しかしわたくしは決して石屋の主人を責めようとは思はな
い。妻の墓を刻む鑿の音を聴く間はわたくしは生きてゐること
の意義を感じる。

x

多摩墓地を歩いてゐる間に月が出て來た。多枯れの武蔵野の
涯にぬつと出た満月は牙えに牙えてゐる。常の日ならばわたく
しは月を見るに耐へなかつたであらう。しかし今夜はわたくし
は比較的平靜な落ちつきを持つて冬の月を顧ることができた。
「母のために、妻のために墓を營んでゐるのだ」といふ考へ
が、わたくしの悲しい心を引き立てゝくれるのであつた。

母のための、妻のための墓が出来上つた時、わたくしは天涯
孤獨の身をいかにして生きて行くべきであらうか。そんな疑
も湧く。わたくしは自分の心を叱る。

「人生にはもつと苦しんでゐる人たちが無数にある。もつと深
い悲しみを抱いてゐる人たちが無限にある。」わたくしの心にさ
ゝやくものがある。

わたくしは人生に於いて何一つすぐれた仕事を成し遂げるこ
とはできないであらう。たゞしかし、人生に於いて最も深い悲
しみを味ひ、最も深い苦しみに耐へ得たる人間として靜かに死
の來るを待たう。

x

x



短歌

與謝野晶子

京都 永田 七郎

紅葉する飛驒路に早く雪ふりて兵

をささぐる家に旗立つ

評

山間僻地の冬の早いことを示しそのやうな山奥から大君の爲め出陣する兵のある状況を歌つた緊張した一首である

福岡縣 佐藤 眞宏

菊つみて童の歸るたそがれの畑を

白くし月ののぼりぬ

評

童と菊の香と月光といづれも澄みきつた晩秋の景をとりあげて快よい

山形市 佐藤 壽來

はるばると戦の地より送られし

ちかき文につどふうかれら

評

この作には表面には嬉しいとも喜ばしいとも書かれてゐない。併し父が兄が戦場にある人から来た短い消息を讀んで家内中が喜び、安堵しあつてゐる様子が眼に浮ぶやうである

千葉縣 高橋 美矢子

我村を護るはこの夜のこの時と子

を背負ひつつはたらく女

東京市 堀江 密道

大いなる白き河原に青き水すこし

流れて秋の鳥啼く

東京市 三野 輪江雪

茅屋根の上に落葉のうづたかくそ

の上に射す淡き木洩れ日

福岡縣 一向 山人

五十とせにちかき我さへ師の上を

思へば若き日にかへるかな

京都市 舟貝 利吉

朝夕の冷たき風にすこやかになり

し手足をあててよろこぶ

岡山縣 中村 護教

紅葉をさぐりありきて奥山の時雨

にかくもあひにけるかな

小樽市 中村 もん

戦に召されし夫子を祝ひつつ去

年もことしも供ふ薩摩

京都市 はやし せき

日の本のこれぞ礎野に出でて

く姿尊とかりけり

京都市 福島 孝治郎

幾山河國へだつれど睦みあはん今日
日の蒙疆使節迎へて

大阪府 永井 隨正

わが子をば國にささげて笑みもら
す神もたたへんやまとなでしこ

北海道 中村 茂樹

元朝の日はりららかにさし昇り蝦

夷が島根にひかりのどけき

京都 郡司 島誠也

我がおやの奥津城どころ大寺の御

廊に立ちて思ふことなし

東京 小泉 妙春

三保がさき波うちぎはに下り立ち

て松原越しに富士を見るかな

北海道 花田 順往

あだ雲を吹きはらひつつさしのぼ

る朝日かやく大八洲根に

和歌山縣 奥村 映水

戦勝の聲にあけゆく大八洲のぼる

初日のつよくかやく

姫路市 内海 一書

心なく友のアルバム繰り居れば亡

き師も在す若き一日を

北海道 寺田 嶺山

人影をふむさへいたくいましむる

昔の教へいみじかりける

東京 梓 晴子

あやまたず進まんことを祈るかな

わがなすことも思ふことにも

東京市 原田 ふで

み佛の教への園に集ひして聖なる

人に逢ふぞ嬉しき

京都 千賀 順

しづかなる御陵のもとぬかづきて

召されし友の武運を祈る

山口縣 三吉 榮正

みいくさの花と散りたる丈夫に花

をまられば白露のちる

栃木縣 大輪 清

山川の淵にかけたる板橋を渡りて

今日も紅葉を踏む

東京市 三浦 福子

われ人に何を語りしひとわれに何

を告げにし去りてやしき

大阪 吉廣 夏生

大杉の深き木の間に音立てて山鳥

たちぬ夕ぐれの山

長野縣 宮澤 圭子

桑の葉のみな落ちはてし天龍の岸

の電車は陽を受け走る

投稿規定

官製はがきに一週二首以内
とし、「浄土」欄に送ること。

渥 志 乃 旅 に 生 て た き 月 夜 哉

浩一路

はてしらぬ旅に出でたき月夜哉 浩一路

新 春 閑 談

近 藤 浩 一 路

坊主になつた積りて

私は中學校へ入つた頃は、大して繪はうまくなかつた。然し卒業頃には相當であつたと見えて、圖畫の先生と二人で、卒業祝賀の氣球に繪を書かせられた様に覺えてゐる。

其の頃から畫家として立つ事に腹は決つてゐた。私の出身中學校（相州蕪山中學）では卒

業の時皆、校長に將來自分の進むべき道を決定してもらふ風があつた。それは先生が一番學生の性向、素質を知つてゐると言ふ理由であつた。

私の番になつて、校長は、畫家になれと言ふかと思つてゐた所、外交官になつたらどうかと言ふ事であつた。意外であつたが、よく考へて見ると、校長は英語の教師であり、私

は英語をよく勉強してゐたからであつた。中學を卒業して、さて美術學校に入る段になつた所、親から始め親類一同が大反對であつた。繪に對する理解なさもあるが、大方其の頃の畫家の生活がみじめであつたせいかも知れぬ。

然し唯一人叔父が賛成してくれたが、こんなうれしい事はなかつた。それには一つの條件があつた。叔父は私を招いて「畫家になるならば、本當に私利、私慾を去り、俗生活に捕はれずにみつちり修業せなければならぬ。全く、坊主になつた積りでやれ」こゝう言はれて私の決心は固められた。

餘技も道樂ではない

私は俳句も多小やつたし、長うたにも幾つ



た事もある。そして最近ではゴルフもやつてゐるが、それは決して道樂や單なる趣味からでは決してなく、私の生命とする繪の進歩の爲

にやつてゐる積りである。つまり繪に一つの餘裕を持たせる爲である。碁、將棋其他ゴルフなどにしても、日本人は一體に、たゞ其の勝負のみに重きを置くやうであるが、私は、そうは思つてゐない。結局は、人格をみがく修業であり、自分の生命とする本技を練る補助課目でなければならぬと思つてゐる。實際ゴルフをやり始めてから心身共に健全で、氣もちよく、明朗な氣分で繪版に向ふ事が出来

る。全く、よろこびの中に仕事が出来来る。生活の爲などと言ふ考へは全く起らない。そして繪にも夫々其の特徴が現はれて来る事は當然である。

日本的洋畫

私は洋畫出身で、岡本一平氏などと同窓であつた。岡本さんは立派な人格者で、繪より學問に秀で、佛教などの蘊蓄も深い様に思はれた。多小の財産も浪費したので私はその岡本さんなどと、生活の爲に漫畫も畫いたが、生活の爲ではやはり完成するものではないと覺り、生活を切りつめて自分の本分に専心した。色々の苦難はこゝで述べる譯にゆかぬが、洋畫も、結局日本的な性格にまで完成されなければ、ならぬと思ふ。

今迄の唯單なる西洋の模倣である間は、決して日本に於ける洋畫の進歩は見られぬであらふ。日本的な特徴と言ふか、日本的な性格と言つた風に、畫に一種のさびが出て来る様になれば、いいのではないかと思ふ。(談)



門

の

哲

學

佐藤良智

緑青々の門松に春の喜びを壽ぐすがくしい氣持は幼い頃の思ひ出と共に忘れ得ないものです。わけてもこの春の東亞黎明のかどでは如何にもこの國の性格にふさわしい清純の門松風景に初まると言つてよいでしやう。

何となく幸ひごとにちなみ多い「門」について語つてゐたい。東西古今「門」のすが形について、せんさくしてみると興味多いことであらうが、今それをしやうとするのではない。

東山の知恩院、芝の増上寺の三門共に特色ある名門として擧げ得やう。私は今その「三門」の意義について語りたい。その

前に境内とそれを圍む門塀と塔堂等を具へた寺は一體何を現してゐるものか。それはあだかも佛像が「み佛」を象徵する様に淨土のすがたをかたどつたものです。今は大方その様式が崩れ、所謂本堂等によつてのみこれをかたどつたものが多い様ですが――。従つてそこにある「門」は穢土と淨土・世間と出世間・悟れるものゝ世界と迷へるものゝ世界との二つの世界の境を現はしてゐるのです。佛門に入るとはこの門を入ることです。三門をくぐることによつて初めて佛門に入ります。これを三解脱門ともよびます。三つのぬけでる門です。經論に「大乘の中に於て、三解脱門あり。もしこ

の門に入らば淨土に入ることを得」とかゝれてゐます。無相門と無願門と。順次にこの門をくゞつてみたい。

このなかの空門は大切な門で他の二つはこれにしたがつてある門です。従つて重なのはこの「空門」です。

あめつちとそしてその中にあるありとあらゆるもの・こと・一つとして全く獨立してあることも生きることでもできず互にもちつもたれつしてすぎゆき、生きゆくといふことです。「一切は緣起で」とあるといふことです。さゝやかな花の一輪も一粒の麥も一枚の紙もましてや人一人のその背後にその中にかぎりなきいのちと力にさゝえられてゐるのです。萬象の關係重り合ふこと限りないのです。これが「空」です。このくしき空門こそまことの人生への門でありこの門こそ眞の生命の流れに流れ入る門です。釋尊が「緣起を見る者は法をみる」と説かせられたのもこれです。自然界(非有情界)は且らくをき人と人の世のすべてはこのこ

とわるによらぬものではない。これを知る者は法即ち眞理を知つたものと説かせられた。

私共は自分ひとりで立派に生きてゐるやうに思ひ勝ちです。しかしその様に思ふ人は人生に盲ひた人です。釋尊は迷へる人、明なき人とも言はれる。門をくぐらざるの人です。

私共は天地萬物の無量無邊の緣力によつて即ちその力のお蔭で生きてゐるのです。お蔭さまといふあのお蔭で生きてゐるのです。このことわりを知る者が空門をくぐるものです。私どもがこの門に一足でもふみ入れてゐるかどうかを計るために次の一つの間ひを自分に起してみるのが一番いゝ。即ち自分に常に「有難い」「勿體ない」といふ心持ちがあるかどうか。またあればどの位の強さであるか。それが強ければ強い程門に足をはこんでゐるのです。お年寄の方が御米粒をぼさつ様とよび、これを粗末にすると眼がつぶれるなど申されます。粗末

にした人の眼がつぶれるのではなくこの人は初めから盲ひた人です。心の眼の盲ひ人です。これらのことを科學教育の淺瀬で迷信などとよぶべきではない。——佛教に育まれた東洋の思想の思想を理解しないと深い大切な寶物を見失ひます——。

わが大和島根の勇敢な軍人がなぜ命を捧げて悔いないか。日本のもろ人は肉の中に血の中に神代より諸神の、大君の、そしてみ國のお蔭を知つてゐる。深く知つてゐる。それ故に、さゝげにさゝげてゆくのです。あゝ、さゝげられたものゝお蔭を民草我等も重ねて受ける。お蔭は無量に重ねられ無限に擴つてゆく。今宵の夕餉の一汁一飯が捧げられた勇士を思へば勇士をめぐる人人を思へば何んで粗末に出来ませう。粗末にすれば盲ひます。口先で「戴きます」と習慣で言ふのではないのです。底知れぬ天地宇宙のそして大君のそしてみ國のみ恵みに戴かずして寒きこの日頃まして温かきコーヒーの一杯が飲み得やうか。豈一握の

飯一杯の茶のみでない。このわがいのちこそ戴かるべき第一のものであるのです。常ひごろわが命と思ふこのわれは廣大無邊なるものゝ命であつたのです。われならぬこの尊き命をわれ今をし戴きて生きんとの思ひこそ空門の扉をし開くかぎです。

釋尊が「破我せよ。無我となれ。我れを破れ」と仰せられたのは「われが」「われが」とわが命はわれならぬことに氣づかず、小さきからに閉じこもり、われとわが心に扉して、わが眼を盲ひしめてゐる迷ひ人に呼びかけられた言葉です。

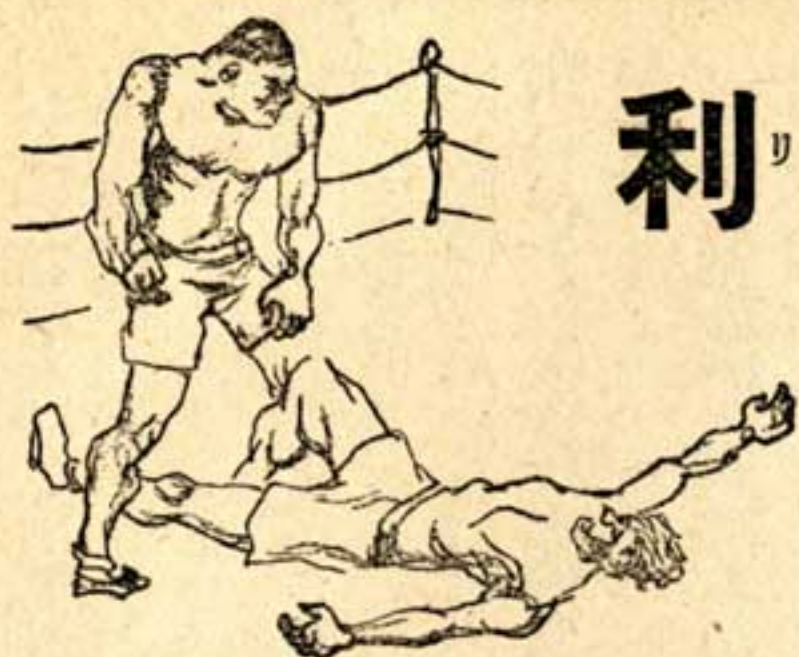
このことわりを體得した敬虔な人こそ空門をくぐる人です。ぶつ道に分け入る大道を確保した人です。くしき哉空門、尊き哉空門です。

空門を語つて豫定の紙數にきた。他の二門及び法然上人がこの門をどの様な鍵で開けられたかは改めて筆をとらなければならなくなつた。

短篇

最 後 の 勝 利

双 葉 信



リボルスキイは、酔つぱらひのやうにヨロめきながら、病院の門を照りつ返へしでムツとする街へ飛び出した。そして、何遍も自分の頭に心配さうに手を當てゝみては、チヨイ／＼立止つた。

彼はこんなに氣になるこの石のやうに堅い頭で一財産を作り上げたのだ。リボルスキイはレスリング選手なのだ。

「何て堅い頭だ。まるで象牙みてえだ」

マネジャーのサミイは何時もかう言つて、彼の頭を賞めてから「お前、死んだらその頭を誰か好きな人にやりなよ。大した遺産になるぜ。ほんとに象牙みていな素的な頭だ、えッ」

と、いつもだるさうな調子でかうからかふのだつた。だが、そんな時、リボルスキイ

は屹度

「俺には遺産をやるやうなそんな好きな人間はゐないんだ」と言ひ張つた。そして、彼は心の中で「本當だ、俺のマルギットは死んじまつたんだ……」と呟いた。

だが、今日、たつたいま自分の象牙のやうに堅い頭も決して不死身なものでないといふことを宣言されたばかりなのだ。醫者は彼の症状を詳細く聞いてから、血のかたまりが或る一點にこびり附いてゐるらしいと言つた。その血のかたまりこそ、先刻の目を眩すほど物凄い試合の結果出来たのだつた。

「何かにひどく衝突なさつたんですね。そんな覚えはありませんか？」

醫者はさう訊ねた。そして、そんなおぼえがなければ内出血ぢやな

いから心配せんでもよろしいとつけ加へた。

リボルスキイは心の中で失笑した。そして、

「このへボ醫者は、俺がちよつとやそこらの衝突ぐらへで、どうして／＼凹たれつこないレスリング選手だつてことを知らないね。だが、俺は偽名を使つてこの病院へかゝつたのだから無理もないが。兎に角サミイや他の奴等に、どうにかしてこの内出血を知られたくないもんだ」と呟いた。血のかたまりは、頭の中で少しづゝ動いて行くらしいのが、彼は何だかはつきり判るやうだつた。「もし、その血のかたまりが頭部の方へ動いて行くと、死は免かれませんか。萬が一内出血だつたら絶対に安静にして強い刺戟や衝動を避けるやうにしないと助からな

い」
と先刻の醫者はさう言つた。

だから、もし首の後に一撃をかうむれば、リボルスキイはその場で忽ち死んでしまふだらう。これは、彼にとつてもう永久にレスリングが出来ないとの恐ろしい宣告を意味するのだ。リボルスキイが、八年間も長い間待ちに待つた明晩のスザラニイとの試合は、絶対に不可能となつたのだ。

スザラニイもマルギツトも、リボルスキイと同じくランシルヴァニアの或る山村の出身だつた。スザラニイは、大男でしかも傲慢で村一番の暴れ者だつたが、その頃のリボルスキイは、發育不充分とまで行かなくとも、小柄な氣の弱い内氣な青年に過ぎなかつた。

スザラニイは、職業レスリング選手となつて、最初の華々しい名聲を獲得した後、大きな額をソリ返へらして郷里の村へ歸つて來るまでは、マルギツトの美しさに別に氣も留めなかつたが、村へ來てから人の噂に彼女が三週間後戀人のリボルスキイと結婚すると聞くと、スザラニイはわざ／＼リボルスキイのところにおしかけて行き、カラカラと大口に笑つて、彼に言つたものだ。

「へえ、お前も大きくなつたもんだなア。女が出来るなんて、ていしたもんさ、だがお前、可愛い女に逃げられねえやうに要心しろよ」
それから、スザラニイはマルギツトを訪れると、虎と練名される今賣出しのレスリング大選手の押出しで、彼は美事に彼女を口説き

落すと、リボルスキイに後足で砂をかけるやうにして手に手をとつて村を出て行つてしました。

リボルスキイが、やつとマルギツトを探し出した時、男に捨てられた彼女はベルリンの貧民窟で死にかゝつてゐた。その時からだ。リボルスキイが、スザラニイに復讐しやうと準備を初めたのは。

リボルスキイはレスリングを始めた。そして、陸々辛苦彼はめきめきと腕を上げ、到頭スザラニイの級までのし上つた。そして、彼をマツトの上に叩きつけ、殺してしまはうとさへ思つたのだが……
リボルスキイは、この數年間そのことばかり考へてゐた。そして、まるで馬鹿になつたやうに我無しやうに練習を續けて、スザラニイの用ひる手口は何もかも知つ

て了つたくらい、スザラニイをあらゆる方面から研究した。そして、遂には彼がいつも得意とする反則——後頭部の關節を捻つて勝つ——といふ卑怯な取り口さへも觀破つた。この反則は、手剛い敵と見ると彼のいつも用ひる奥の手だつたが、その取り口があまりに巧妙なので審判は誰一人としてこれを觀破るものがなかつた。

だが、リボルスキイはこの發見を誰にも打開けなかつた。スザラニイが、ビツバアグ・キツドと闘つて水の入つた問題の試合の時でさへも、彼の口は固かつた。
その試合は、一ヶ月ばかり以前行はれたもので、ビツバアグ・キツドはリンクから直に病院へ運ばれたが、レスラーとして最早立つことは出来ないと言告され、今では廢人同様病室で暮してゐる

のだ。リボルスキイは、あれはスザラニイのお得意の手でやられたのだと言ふことをよく知つてゐたが、決して口に出さなかつた。

彼が何故こんなに口を固くしてゐるかには、自分自身の理由があつたからだ。それは、いよいよ彼の順番が廻つて來たからだ。八年間も長いことを待ちにまつた試合がいよいよ行はれるのだ。彼はその場面を今まで何千回空想しただらう。

——スザラニイは、最初はきつとフンとセセラ笑ひつて聞ふだらう。だが、やがて次第に自信を失くして、顔が蒼白になつて來る！ その時俺は、彼奴と組合ひながら「お前を今日こそ殺してやるんだ！ 死んだマルキッドのために」つてそうツと彼の耳に囁くのだ。そして、そ



の後で何が起きるかには言はなくとも判つてゐるサ、——
リボルスキイは、ムツと灼きつけるやうな舗道の上で、ぐつたりと疲れたやうに眼を開けた。彼のこの空想がまだありありと眼にチラついてゐた。

しかしこの頭の傷ではもう彼は永久に虎（スグラニイ）に勝つことは出来ないのだ。リボルスキイが何とも言ひやうもない焦燥にとらはれながら、無鐵砲に彼方此方の街を徘徊ついでゐる時、彼はふと賣り子の手にした夕刊の大見出しに目をひきつけられた。

「ピツパアグ・キッド死す」

そこには、さう書かれてあつた。

「新聞御入用ですか」

ぼうつとしてゐた彼はその聲に我に反つて急いで新聞を買ふと、食ふやうに活字を追つた。

「野蠻、且つ低級なスポーツ禁ず
また歩き出した。

べし……選手の手を恐るべき一撃
は、遂にキッドを死に至らしめ

た。虎（スザラニイ）は告訴さ
るべきであるが、今のところ彼を
断罪すべき證據は一つもない。

……もし同じような手で、スザラ

ニイが再び残酷な結果を敵手に
與へたら、司法當局はすぐ告發す

るだらう。だが、スザラニイはお

得意の手を明晩も再び繰返すに

ちがひないのだ……」

彼は活字から眼を放すとふらつと

また歩き出した。

リボルススキイのマネジャー、サ

ミイは眼にいつばい涙をためな

がら、證人席から立つと鼻をすゝ

り口を開いた。

「その晩、リボルススキイはリング

に上る前、私にかう言ひました

「ピツバアグ・キッドは、かう言

ふ手口でスザラニイに殺られたの

だ。あいつは今晚もきつと同じ手

を使ふに違ひない」と、しかし、

法然上人の御忌

一月廿五日は法然上人の御忌

に當ります。即ち今から七百二

十七年前の此日に法然上人が御

臨終遊ばされたのであります

「あとを一瞬にしむれば遺法あ

私は馬鹿なこつたよ、そんなこと

はないさと笑ひましたが、彼は眞

面目な顔付をして、「どうかよく彼

の手口を注意して見て置いてく

れと何遍も頼んでリンクに上りま

した。そして、私は審判のところ

で、その試合に彼の言つた通りの

ことを觀たのです」

サミイはかう證言して席にもど

つた。

首席陪審員は「うむ」と頷いて

キツと口を結び、裁判長は、机上

にある紙片にすらすらと何か書き

つけた。虎・スザラニイは被告

席に片手をズボンに突つこみなが

ら、特徴のある大きな眼をさも人

相の惡るさうにギョロリとさせて

法廷を見廻しながら、サミイの決

定的證言に顔を蒼白にした。

やがて、彼のちつと閉ぢた眼が

幾分びくりつと痙攣したやうだつ

たが……

スザラニイはリボルススキイがリ

ングの上で倒れる直前、觀衆の

騒然として吐號の中で勝ち誇つた

ような奇妙な表情をして、頭を振

りふり、あの白い照明と觀衆の

怒號とをふり拂ふやうな身振り

で、青白いライトを浴びながら死

んで行つた瞬間のことがまざま

ざと自分の心臓をしめつけるよう

に、後から後から襲つて來るのを

拂ひのけることが出来なかつた。

突然、どたんと大きな音を立て

ムスザラニイは法廷に卒倒した。

「リボルススキイ！ 俺はお前に負

けた。サミイの證言の通りだ！」

スザラニイの吐きれ聲がかすかに

法廷に流れて、彼の手に握ぎられ

てゐた白い粉がバツと邊りに散つ

た。（終）

齋藤 清畫

—ダイアナ・ブルボン作—



現世を否定する心

倉田 百三

現代の新しい宗教は現世の生を肯定しなければならぬといふはよく云はれることである。これはこの命題として間違ひではない。いかにも宗教は此の現實の日々の生を強く、濃く肯定する力を發揮し得るものでなくてはならない。

けれどもそれは樂天論者や、進化論者や、また人間の愛と、美と營みへの禮讃に終始するギリシヤ主義者やの如き意味で、一面的に、此の現世の生を肯定するのではない。まして秦の始皇帝が不老不死の靈藥を求めたように、此の世は命だに長かりせば盡きせぬ快樂の饗宴であるとして肯定せらるべきものではない。

宗教に於ける生の肯定とは一面的な肯定ではなく、かのブルンナーや、バルトなど、辨證法神學者が云ふように、肯定と否定との矛盾面を一如に持つ、寧ろ「生を受ける心」とも表現すべき微妙なる心境である。

柴の戸のあけくれかかる白雲を

いつむらさきの色に見なさん

この法然上人の歌はその心を心憎く云ひあらはしてゐる。

しかし論理は一面からしか表現出来ない。

「宗教は現世の生を否定する心である。」

先づ以てかく言表すべきものである。此の言表に共感を持たぬ者は宗教生活者ではない。宗教生活者はかう云つて欲しいのだ。かう表現される時自己の胸の底深く無量の「生」の感慨が起るのを自覺するであらう。

愛し、望み、たたかつたところの數々の思ひ出、悲哀と後悔、血を吐く懺悔、限りなき寂寥、止むなき限界——すべての此の現世の生を缺けたるもの、假現のものと意識する斷乎たる諦觀を裏書きされて感ずるであらう。

現世の生を樂觀的に、一面的に、光明的に肯定する心は宗教

心ではないのである。

そのように含著なき、背景なき、陰影なき生の感覚がどうして宗教の名に價するであらうか。

高く、美しく、完きを望む宗教祈願より見るとき、此の世は穢土である。五濁惡世である。人と人と争ひ、靈は肉から離れず、善は惡なくしては行はれず、愛は物的に制約せられ、美は快樂に汚染せられ、そして眞は理性認識の能力から逸する。

此の世の現實の生の姿に嫌厭しないで居れるであらうか。その生の法則そのものの相對性に幻滅せずに居れるであらうか。

此の現實の生、娑婆の掟そのものは我々の宗教的欣求を満足せしめないものである。個々の善や、美や、愛の斷片ではなく、全體として此の現世の生を否定する心を一度斷乎として決意しなければならぬのである。

トマス・ア・ケムピスは「此の世は糞の如し」とさへ云つた。

宗教は娑婆の掟と違つた別の國を求むる心である。彼の世を、彼岸を、淨き土を憧憬するゼーレンゾーフトである。

むらさきの雲の飄颻する聖なる國を思慕する心である。

現世の生の否定こそ宗教の權威であり、本質であり、位階でなくてはならぬ。

單なる現世の生の肯定は低卑である。もとより宗教は福音のためにあるものだが、現世の幸運のためにあるものではない。

宗教に於ける福音とはみ佛の恩寵により、我々が此の相對と限界との法則の生から、絶對にして無限なる生に新たに生まれ得しめられる救済を、思索や、體驗によつてではなく、啓示によつて示されて信ずる大歡喜である。

「よき人の仰せをかふりて信する外に別の仔細なし」それは自分の思索や、體驗でなく、全く天下一の他から啓示されて信じる心である。もとよりかやうな啓示を「聽きて即ち信じる」ためには、生の思索や、體驗が準備されねばならない。併し救済の恩寵は彼岸から來るのである。召喚されるのである。

宗教に於ける現世の生の肯定とは、此の相對と限界との掟の生を、恩寵の光に照して、その罪、汚染、制約のあるがまゝに、もはや救ひとられて完くなつてゐる見えざるに於て感謝して受けとる心である。すなはち此の現世の生はプラス恩寵によつて全體なのであつて、未信者には見えざるそれなくしては全體ではないのである。宗教的人間をうつしみ、モーター、被造物と云ふのはその心である。

かくて、此の「うつし世」は安んじて愛惜せられ、同悲せられ、憐れせられるものとなるのである。

宗教的人間は其の人間としての身分を、罪、汚染、制約の掟の下に受容せねばならぬ。それを超えることは法への冒瀆であ

る。この受容によつて、この罪、汚染、制約の現世の生を愛惜し、同情し、あはれと涙と慈情とさへ持ちつつ、うつしみらしく生きる心境を勝ち得るのである。

人間らしきとは、この罪、汚染、制約を受容する謙虚である。

人間らしき故に、彼岸の浄土を思慕し、人間らしき故に此の現實の生を愛し、惜み、郷愁するのである。

宗教的人間は浄土を欣求せずには生きられない。けれども亦娑婆を愛惜せずには生きられない。何故なら「人間」といふものが恰度そのやうな身分の存在であり、宗教の救済とはその身分のままに、み佛の恩寵の加はるにより、全きものとされることだからである。

宗教的人間の現世の生の肯定とはこのやうな矛盾せる両面の辨證法的肯定でなくてはならぬ。

若し人間が此の現世の生を一面的に肯定するならば、必ず高く、淨き、靈の世界を失ふであらう。併し若此のアクチュアルな生を一面的に否定して生きやうとするならば、それは人間の身分を越える故、必ず堪へ難き此の世への郷愁に催されて満足して生きることが出来ないであらう。法然上人の信仰の心はこの両面を黄金中正的にとらへて居るのである。

われはただ佛にいつかあふひぐさ

こころのつまにかけぬ日ぞなき

かりそめの色のゆかりの戀にだに

あふには身をもおしみやはする

むまれてはまつ思ひいでんふるさに

契りし友のふかきまことを

これらの歌には、彼の世への乗託と現世への愛惜とがひとつに融けて居るのである。

私はトマス・ア・ケムピスのやうな現世の否定のみの強調を一種の増上慢としてとらぬものではあるが、この頃の日本の宗教界のやうに、現世の生をただ肯定し、世間的の幸運を求め、又世間成就といふことのみを力調する傾向は宗教の深く、高き心境を逸脱する危険があるとおそれるものである。

世法の成就のみならば、たとひ此の地上に浄土を建設しようと努力しようとも、それは根源的に宗教心と相反する方向である。宗教によつて浄土は飽くまで彼岸にあり、地上の浄土はそれに似たものを、そのおもかげを現世に映さんとする、人間の止みがたきありのすさびである。そのありのすさびは人間的に尊いものである。我々の見ゆる世界に於ては最高の尊きものであり、現し身のいのちをささげてその營みをなすべきものである。恰もみ佛の誓ひに似たものとして、人間の戀の誓ひにいのちをかけなくてはならぬやうに。たとひそれは崩れ易い地上の掟の下にあるとしても。(一九三八・十二・六)

俳壇

大田 耳動子



瀬ノ川 宮本 白土

井戸替へて青竹の蓋つくりけり

評「青竹の蓋」は眼も醒めるやうな清々しさである。此の井戸から湧く水の清冽さが偲ばれる。

浅草區 鈴木 白舟

稲刈られゆくかの力尊しも

評「何事にも感謝の念がなければならぬ。作者はそうした氣持でサク／＼稲を刈つてゐる農夫を見てゐたのであらう。そして健康な偉大なと思はれる力の前に成る尊いものを感じて生れた句であらう。

廣島市 小 楓 邦 香

白無垢の姿美はし月のこと

評「寒き夜に神々しい姿が想像せられる多分嫁入宴なのかも知れない。『月のこと』と云ふ下五字は極めて鋭く且つ適切な比喩で、此の一句を教うて餘りがある。

香川 荒木 はち

さゝやかな家さゝやかに注連飾

姫路 内海 眞 瑠

懐手流るゝ芥見て居たり

東京 三野 輪 江 雪

街道の名残の松か暮の秋

樹木 大輪 云海

夕べ降りて流に映る雪となり

新宮 奥村 映 水

白妙の菊の薫りて勇送式

長野 宮 澤 榮 子

大霧のくまなく晴れて晝近く

東京 雅 恵

あざやかに山茶花ちれり今朝の庭

大津 別府 葉 子

朝寒に金箔はげて佛蓮

愛媛 千 葉 長 行

菊の花折るほどに秋深みゆく

中支 新田 眞 砂

朽ち果てし屋根のかゝけて月天子

大阪 井 上 文 成

戦友の墓標香らせ野菊かな

堺 笠井 松 枝

初日さす彌陀の顔あかきまで

京都 津田 秀 月

法然上人の御堂に秋暮れて

東京 原田 ふで 女

年の用意佛具の塵を拂ひつゝ

〇〇陸軍病院 大久保 宿 義

常磐木に夕陽こぼれん冬の山

岐阜 賀 重 野 ふみ 子

鐘の音の蔽ひきたりぬ年の暮

名古屋 鷺 津 耕 順

經藏の壁に紅葉の照り映えて

朝鮮 盤 江 八 年 坊

眞白なる障子うつくし菊の秋

長野 宮 澤 圭 子

秋やよし碧空紅葉松緑

小樽 平井 不 善 居士

床下に鼠鳴きして菊の秋

京都 水田 七 郎

菊ね來て世の人ならず秋悲し

大阪 河内 楠 香

下枝に梢見てゐる雨蛙

小樽 中村 も ん

波止場越す波の白さも多の海

山梨 津田 瑞 泉

紅葉の盛なる日に映りぬ

樹木 大輪 清

東風あれば菊の薫りて勝手元

青森 高松 竹 堂

松たてゝ國歌になびく我らなる

下關 關野 公 孫

秋の山はるかに展く瀬戸の海

東京 瀧 全 龜

秋深き水の齒の根にしみ入りて

小樽 中村 茂 舞

照り映えて雪美しき朝日かな

〇〇陸軍病院 小平 勇 一

霜ふりてより豆柿の甘さかな

佐賀 阿木 咲 子

引越しの大荷のかげの小菊かな

熊本 牛島 琳 平

高原の美しく枯れ山とがる

群馬 馬 佐 保 太 郎

我が屋根に憩ふともなく師走月

大阪 谷 上 草 眠

麥詩くや風碧天に吹きそりて

岡山 中村 護 孝

木枯にからびて石の佛かな

神戸 森本 敬 二 郎

落葉掻く音の林に木霊して

新潟縣 西 巻 伯 東

枕邊に一疋の蚊の聲さみし

兵庫縣 坂 垣 利 憲

多晴のポストに手紙よみかへし

小樽 トミヤ

朝日さす炭小屋に來し雉子かな

下關 内 藤 豊 海

汐風に夕陽に早し草紅葉

投稿規定

官製はがきに一四二句以内とし「俳壇」欄編輯部併係あて送ること



童謡

赤い手袋

小川 金英
野水 昌子 畫

「さようなら、さようなら」日曜教園もおさがりで子供達は皆お別れしてご門の方へ楽しそうに出て行きました。

その中に赤いマントを着た美代ちゃんも居りました。美代ちゃんはまんまるいお目めでおかつばにしてみました。美代ちゃんがこの日曜教園のお友達となつてから只の一回も缺席した事ありませんでした。そして美代ちゃんは歸りにはキットご門のそばのお地藏さまに「さようなら！」するんです。

今日もお地藏さまに「さようなら」してお地藏さまを拜んだら美代ちゃんを見てニコニコ笑つていらつしやる様でした。

「お地藏さま又まゐります」

可愛い聲でこう云つて美代ちゃんは歩み出しました。美代ちゃんは歸りながらこんな事を思ひました。

「お地藏さまはこんなに寒いんだのに帽子もかぶらずに凍えないのだろうか、どうしてあつて外に座つていらつしやるんだらうかしら」と。

お家の近くまでまゐりました。美代ちゃんのお家は町はづれの小川の邊りでした。

「お母さん只今！」

美代ちゃんの元気な聲に出て來られたお母さんは、

「今日はとても寒かつたんでせう」

こう云ひながらマントをぬがして下さいました。

「いゝえ、でもお地藏さまの事を思ふと
そんなでもないの」

こう云つた美代ちゃんは毎日學校に行く時も歸りも美代ちゃんのお手てを温めてくれる赤い毛糸の手袋がはまつてないのに氣がきました。この手袋は去年去くなつたお父さんが東京から買つて来て下すつた今は遺品のお土産だつたのです。美代ちゃんは自分のお室に来てポケットやらそこゝとさがしたけど見つかりませんでした。

「あアきつと日曜教團に忘れて来たんだらう」

と思つて母さんにコッソリもどつて見たけど何處にもありませんでした。

しよんぼりと立つてゐた處はいつものお地藏さまの前でした。

どんよりとしたお空からはメイ／＼小山

羊のおべゝの様な雪が降つてきてお地藏さまのお頭の上も眞白になつてしまひました。
「あのネー お地藏さま、私手袋を落したの」



こう云つた美代ちゃんのお目々に一つばい涙がたまつてました、尋ねあぐんだ美代ちゃんがかつかりしてお家にもどつたのはもう夕

方の頃でした。いつも可愛いがつて抱っこしてやる三毛猫がニヤンコして来ても、たのしい夕飯になつても美代ちゃんは見えない手袋を思つてました。

寒い／＼雪のお空にお星さまがポツチリ／＼見えてお寝みの時間が来てお床について、まだあのなくした手袋の事を思つてました。

「歸りの雪道に落したのを誰かに見つけられて知らぬお手てにはまつてゐるんじゃないかしら、それともあの寒い雪の下に凍えながら泣いてゐるんじゃないかしら」

とそんな事を思ふと何んだか雪の下ですゝり泣いてゐる様な氣さへするのでした。美代ちゃんは静かに目めをつむりました。そしてお手てを合せてお地藏さまにお願ひしました。

「お地藏さま！ どうぞあの手袋が見つかつて私のそばに来れる様に」つて。
小さい胸をいためながらいつかお空が暗く

— 赤 —

なつて荒れ模様になつたのも知らずスヤ／＼と暗い悲しみに寝入つたのでした。寒い風がガタゴトとお窓を鳴らしながら通りすぎました。お地藏さまのそばの松の木も可愛そうにふるへながら泣いてました。でもお地藏さまは何を考へてゐらつしやるのかいつもの通りだまつてました。きつと美代ちゃんの手袋の事を心配して下さつてゐるのでせう。

— 手 —

狂ひまわつた風の子達もやがてどこかへ去つてしまひました。そして宵にせつかく積つた雪も風の子達に吹き飛ばされてしまひました。

— 袋 —

心配だつた一夜もあけてお日様がニコ／＼笑ひながらお山にのぼつても、窓邊のカナリヤがうれしそうに唄つても、美代ちゃんはまだ手袋の事を思つてました。

もしかしてと美代ちゃんは學校へ少し早めに家を出て、昨日歩いた道をたづねてお寺のご門の前のお地藏さまのそばに來ましたけれども、どこにもありませんでした。美代ちゃんのお顔は悲しさが一ぱいでした。涙が出そ

うになつたのをじつと我慢して、

「お地藏さま！」

と云つてお地藏様をながめました。

するとどうでせう。お地藏様のお手々にちやんと美代ちゃんの手袋がのつかつてゐるではありませんか。「さあ、美代ちゃん、おとりなさい。」と云はんばかりに。

美代ちゃんはほんとにびつくりしてしまつて、しばらくはきよとんとしてお地藏様のお顔をながめてゐるばかりでした。この石のお地藏様がまるで生きてゐる佛様のやうに見えて來るのです。

それはきつとかうだつたのかも知れませんが、そこを通りすがつた人が落ちてゐた赤い子供の手袋を見付けて、親切に人の眼につくやうに地藏様のお手ての上につけて行つて下さつたのかも知れないのです。親切な子供好きなおぢさんか、おばさんが。

でも、美代ちゃんにはどうしてもお地藏様が、拾つておいて下さつたとばかり思はれてならないのです。お地藏様が私達をお守り

して下さると云ふのは本當なのだ。まあなんと有難いお地藏様！ 美代ちゃんは恐るおそるお地藏様のお手から手袋をとると、

「お地藏さま！」

つて赤い手袋をほゞずりながら見上げました。お地藏さまのお顔にもうれしさうに笑つてゐらつしやる様におがまれました。

「お地藏さま！ この寒い一晩中だまつてそこで誰にもやらずに私の手袋を見張り番して下さいましてほんとに有難度う御座いました」

と可愛いお手てを合せておじぎをしました。そしてその赤い手袋を大事にぎつて學校にいそぎました。お地藏さまはお禮を云はれてもだまつていつもの通りお目々をつむつてました。

そばの松の木にいつ來たのか小鳥が二三羽とまつて樂し相にさえずつてました。次の日曜に赤い手袋をはめた可愛い美代ちゃんはお地藏さまの前で笑つてました。

● 信 仰 相 談 ●

中村辨康擔當師……

〔本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰田談係宛のこと。誌上匿名は可〕

如來の願力と縁起・信仰と
自己陶醉・明らめる・其他

問

十月號の質問欄に於て「信仰に入り精神界の

事に明るくなれば朗らかな生活が出来ると御教を頂きました

のですが、實は私は既に十幾年阿彌陀如來を信仰し本願力に依憑して、専ら未來世の往生を期し心強い法悦生活をつけて來た者です。然るに其歡喜が根こそぎ奪はれてしまふたのです。

是れは私の信狀が幼稚であつた爲で有ると自ら知る處なのですけれど、今日其失ふた法悦が惜しくてならぬのです。謬信は許さなければならぬ事は申すまでもない事ですけれど私の心

持としては、矢張り謬信ながらでも法悦に浸り得た昔の安心を取戻し度い程に、今日の人生が淋しいのです。若し重ねて先生の御教導を得られますならば幸甚と存ずる次第です。私の以前の信狀は、佛とは宇宙の眞理を悟つた覺者であつて、其覺者たる彌陀如來は本願力を以つて衆生に働きかける事に依つて衆生を救ひ給ふのである。云ひかへると彌陀如來にも知情意が有つて（永遠常恒に）それと本願力なる神秘的活動力の働きにより、凡夫を導き死の一期を機として無生忍を得しめ給ふので

ある。と斯う信じて居りましたのです。處が佛法では常一主宰を否定するのであるから、主宰力の無い彌陀如來が、流轉極りなき業繋の凡夫を救ひ取り、これに永遠の眞實生命を賦與すると云ふ事は出来ない筈だと思ひます。従つて私の以前の信仰は謬つて居つた事を知つたのです。私の失望は茲に醸されたのです。

宇宙には一貫せる法則があつて、萬法は其法則の下に因果の理性の下に、顯現活動してゐるのである。そして自然は公平であつて平等に一切を育くみ導いてゐるのであつて、自然の恵には依估は無いのだから、我々が救はれると云ふ事も信仰の有無には關係の無い物だと考へられます。或るお知識は「我れ佛に救はれてゐる」との自覺其事が、吾

人の心を安住せしむるのである。此自信が人生生活を強め又歡喜せしむるのだとか、亦佛の存在と云ふ事に就き吾人が佛に向つて恭敬禮拜する其處に佛があるのだ」とも仰られます。是れ等の御説を自ら考慮致しますると、私は以前私が彌陀に救はれてゐると考へてゐた事は、實は彌陀の救済では無かつたのであつて、それは一種の自己陶醉であつたとも云ひ得るの

で無いでせうか。彌陀の願力に依つて得られると信じて居つた極樂往生とは、別に、彌陀の感情や意志が現はれて、客觀的で救済の働きを吾人に振向けるのでなうて、菩提も涅槃も皆自分から研ぎ上げなければならぬのだと、斯う私は考へられます。そして以前味ふて居つた隨喜の念は何處かへ吹き飛んでしまいました。

たのであつて、それは一種の自己陶醉であつたとも云ひ得るの

たのであつて、それは一種の自己陶醉であつたとも云ひ得るの

信 仰 相 談

世には澤山な物を知つてをりながら、安心を得られない人があり、亦た何も知らずとも安定した生活と安心を持つ人がある事も聞いて居ります。一體何うした處からソンの安心が出て来るのでせうか。

人生は要するに「花の散るのもそれが自然のまゝぢや」と諦めらるるそれだけで云ひつくされるのでは無いでせうか。結局大らかに對して只だ忍従する心境之れが往生極樂の境地と云ふ事になるのでは無いでせうか。私は自機の劣惡を省みる時に既に今日の深き恩恵を感じ感謝を捧げないでは居られませぬ。併し其感謝を何に向つて捧げるべきか、確認されないのを悲しく思ひます。と同時に忌從には歡喜の伴はないと云ふ淋しさを感ずるのであります。

(京都・上京・小林)

答

誠に深刻な御質問で、心から御同情申し上げて居ります。折角御信仰を持つて居られましたのに、理論を求めて理論にお負けになつた譯でございませう。然し、それも御自分の信仰を徹底させたいからの事で、眞剣に道を求める人ならば一度は理窟の中にとちこめられて前途が暗くなる事もあるものでございませう。隨て世間にはかう云ふ悩みを持つて居られる方も多からうかと存じますので、簡単ながら御答へ申し上げます。

第一の問題の「佛法は常一主宰を否定するから阿彌陀佛にも主宰力はない。隨て業繫の凡夫が救はれて永遠の生命を賦與される筈はない」と云ふことと第二の「宇宙には一貫して居る因果の法則が整然として公平に顯現して居り、平等に一切を育

くみ依估と云ふものは無い。だから我々への恵みは信仰の有無に關係しないと云ふこととの二つは縁起に關係して居りますから一括して申し上げます。

一體「常一主宰」と云ふのは「我」の説明でありまして、一切は個々が單獨で成り立つて居るものではなく、天地一切の凡てに關聯して居り、場合々々に依て主ともなり伴ともなるもの、實は、主と伴と同時に具有して居るのであるから、一切を内包しない「一」もなく、一切を主宰する主もなく、また刻々に變化進展して行くから不變化即ち「常」と云ふこともない。隨て常一主宰の意味を持つて居る「我」を固執することは縁起の理に違つて居るのに、私達凡夫は常に「我」を立て「我」に執着して、誤て「我」は常住なり我は一なり、我は我を掌る者な

り」と考へて居るところから、謂ゆる迷情の儘に流れ行く流轉の生活をして居ります爲に、結局、「業」に繋られて居る次第なので御座います。

「永遠の生命」が、單に「生命」と云ふ時間的な意味だけならば寧ろ「迷つて居る者」が持つて居るもので「常沒常流轉」の凡夫に與へられて居る譯であります。生れ替り死に替り「窮極することなき迷路の長旅」何とまあイヤな永生でございませう。此の「迷へる流轉の永遠の生命」から抜け出て「迷はざる生死なき姿」即ち「無生」の「生」に到らんとして或は「八正道」を行ひ或は「六波羅密」を行じて一心に修養せんとするのが聖道門の實踐者達であります。然し如何に修養に専心しても「我」を破ることは縁起の理に徹せざる限り、生活の事實が容易に

信 仰 相 談

之を許して呉れませぬ。此肉身を持ち色々な見解を持ち自我主張の多い周囲を持つて居る關係上、其中に處して獨り白蓮華の清らかさを維持しながら、周圍に應同して行くことは誠に困難なことであります。それは卑怯でも何でもなく實際のことでもあります。理窟は判つても事實が出来ません。然るに此の儘の姿でよいかと云ふに、此絶對的な望みは到底捨てる事の出来ないものなのですから、何とかして別な方法を求めなくてはなりません。之に應同した道が淨土門だったのでございます。

また「因果の理法」と云ふことも一つの眞理ではありますがそれは堅の關係だけを云つたものですから、完全な云ひ顯はし方ではありません。横の關係も考慮の中へ入れないと往々にして世の中の事實に喰ひ違ひが出来ます。つまり因は因だけでは「果」を現はし得ないからです。其處にはいくつかの「縁」と云ふものが非常に大きな役割を持つて居るのでございます。しかも「因」と「縁」とは時間的關係とか力の強弱關係とかに依つて區別されたもので、事實複雑な社會現象はさう簡単に片付けられないものです。だから「重々無盡」などと云ふ言葉も使はれて居る譯です。堅の關係だけです、無因有果、小因大果他因自果及び夫々の反對の状態などは許るされませぬけれども、人間生活の事實は「親の因果が子に報ふ」などの言葉もありますやうに他因自果の状態があるものです。例へば或會社が工場を建た爲に周囲の土地の價格が高くなつたり、或は水の爲に一變に荒地になつたり他國の事變の爲に爲替相場が變

動したり、根もない風説で株が暴落したりなどして、二に二たす四と云ふやうな譯に行かないことがザラにあるのですから、因と云ふものだけでなしに色々の縁の加減に依つて結果と云ふものが色々に變化して來ます。イヤ實は縁が刻々に加減されて行くから現象が刻々に推移して行くのです。だから宇宙の理法は「縁起」であつて堅だけの單なる因果關係では考へられないものです。

「信仰上の救ひ」もまた之の「縁起」の理の上に立つて「佛願強縁」と見るもので、天地一切の上に平等に輝いて居る慈光であつても、夫を仰ぎ慕ふ者の上に強い縁力になる事を是認するものです。例へば溺れて居る者を救ふ爲に平等に繩が投げられて居ても、それにつかまらなくては救はれませんやうに、或は月の光が地上の凡てのものを照らして居ても、それを仰ぎ見て「美しいなあ」と感じないものに詩的情操が養はれませんやうに、實は一切は如來様の慈光の中に居るのですけれども、それに氣の付かない人は唯だ自我の凡情の儘に流轉を續けなくてはありませぬ。然し夫に氣付いて如來の御慈悲に感泣する者のみがその如來様の大み命の中に攝取されるのは當然でございます。(以下次號)

中村先生のお答へは全部頂いてゐるのですが、紙面の都合上残念乍ら、以下を次號に割愛せざるを得ませんでした。讀者並びに御質問者に對しては申譯ありませんが事情御諒察願ひます。尙本號にはこの一問しか載せられず、他は次號以下に残りましたからそれも不惡思召し下さい。(編輯部)

淨き友の會だより

東亞新秩序建設の 新春を壽ぎ奉る

鑽仰會友たる淨き友の集りも既に坐談會第十一回を過ぎまして、愈々健實になり、各地にもさうした集りが追々結ばれやうとして居ることは、本當に嬉しい事で御座います。貞恭婦人會を初め、立石様中心の願行寺様の集り、鶴見良忠寺様の集り、成城學園村の集り、或は遠く北海道小樽の淨友會など、各地に毎月例會の催されつゝあることは單に「淨土」が雜誌としてあるだけでなく、眞の信仰雜誌としての機能を發揮して居る譯で、事宗教に關する限りさうならなくては本當の進み方ではないと存じ上げます。私が昨年の二月から中村先生を招き、更に十月から之を擴充することを念願致しましたのも、「淨土」を通しての信仰をもつとく固い結束の下に確實

感想 一つ一つ

淨き友の會の未席をけがして

鳴海 要吉

實際信仰に這入つたといふのかどうか、まだ確信も何もありません。今のところでは、法然上人に無條件でおすがりし度いと努力してゐるだけなのです。煩惱の強すぎる私は、随つて理論の有り過ぎる私なのです。その理論で迷つてゐると言へば實は悟つてゐるのです。これは決して自慢に言つてゐる譯ぢやありません。此の悟りといふものほど苦しくそして深い迷ひは無いからであります。今日の科學的理論或は見方といふものを私は一面から言ふと可なり精密に確乎と認識してゐるのであります。けれども、此の科學的認識が恐ろしい大地獄であることを體驗した私は、今、此の大地獄から喘ぎながら浮きあがらうと眞劍に努力してゐるのです。そしてそのすがりの元力として、法然様を頼つてゐる譯なのであります。不思議なもので、頼つて見ると、そのおつしやられた言葉に、別に科學的根據などあると思へないでも、それが一番正しく又有難く聞えます。勿論、科學的根據が無いといつたからとて、それが不道理だと申す譯ではありません。唯今の私は、言葉の説明を求めてゐるではありません。唯、法然さまその人に、あやかりたいとでも申しませうか。或は、服従したいとでも申しませうか。ともかく、法然様に對して無條件にお

にして行きたいからだったので御座います。全國到る處に例會の坐談會が開かれ、眞剣に信仰を求めらるゝ方々の彌やましに多くならんことを念願して居る次第で御座います。

今年は卯歳ださうでございいますが、兎はおとなしいけれども中々機敏な動作を致しそして繁殖率も極めて多いとの事でございいます。私達「淨土」の友も本年は一層機敏に働いてゲン／＼淨いお友達を増加して行きたいと思ひます。それで来る十五日の新年初會に何か意義あることをしたいと計畫して居ります。何うか御誘ひ合はされまして御越し下さいますやうに御願ひいたします。(橋本樂榮)

迷ひなく唯だ一と筋に眞白なる

まことの道を過ぎて行かばや

信仰座談會案内 (來臨歡迎)

日時 來ル一月十五日午後六時 (第三日曜 第十二回)

一月廿二日 (第四日曜 第十三回)

一月廿九日 (第五日曜 第十四回)

講題 般若心經講義 (本年から開講)

講師 中村辨康先生

場所 本郷區東片町七八美容大學院 (電車白山上下車)

橋本樂榮方 (電話小石川【85】四九七六番)

すがりし度いと努力してゐるのであります。従つて、そのまた本元であるお釋迦様には勿論のこと、之を取りついで下さる中村辨康先生に對しても、その通り有りがたく感謝して居る次第であります。

一例を申しますと、どなたでしとか、信仰が強ければ、鐵砲の彈が飛んで來ても頭もさげないでゐられる勇氣が出る筈だといふやうなお話がありました。が、私もさうなり度いと念願は致しますが、今迄のところ實は、そんな強みの無い逆も臆病な私なので、此の臆病のまゝでも大往生させて頂き度いと思つて居るのです。これも私のおすがりの一つ理由なのであります。(二五九八・臘・五)

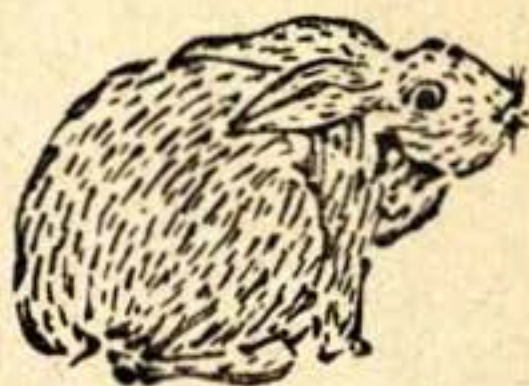
感想

戸谷さか恵

十月十七日、神嘗祭の日知人の

方より今晚橋本樂榮様の御宅で中村辨康師の信仰座談會がありますから、お近くではあるし御出でなさいと御知らせ下さいましたので初めての處ではあるし、ぶしつけの様に思ひましたけれど、佛の道を聞くのにと思ひ、夕食もそこそこにして行きました處、最早二十三人の方々が熱心に中村師の講演を聞いておいでになりました橋本様には初對面ではありましたが、どうようこそ來て下さいましたと云はれた時にはほんとに嬉しく思ひました、それから日曜ごとに缺席せずに参加して居ります、此頃では中村師が熱心なる御講演下さいますのでいくら佛の道の事も判る様になりました事を深くよろこんで居ります。

いたらざる心の胸にむちうちて佛の道にたどりつくらむ聞きたびに絲のほつれをとく如くみだれし心淨きにぞすむ



心こころへの主人しゅじん公こう

日常勤行式解説にちじやうこんぎやうしきかいせつ

中村 辨 康

(三) 四奉請ふせうきん

(我が心殿に尊貴なる者を勧請す)

奉請十方如來入道場「散華樂」

奉請釋迦如來入道場「散華樂」

奉請彌陀如來入道場「散華樂」

奉請觀音勢至諸大菩薩入道場「散華樂」

請し奉る十方如來よ。道場に入りたまへ。

「散華樂」

請し奉る釋迦如來よ。道場に入りたまへ。

「散華樂」

請し奉る彌陀如來よ。道場に入り給へ。「散

華樂」

請し奉る觀音勢至諸大菩薩よ。道場に入り

たまへ。「散華樂」(五會法事贊ニ出)

意 譯

御招待申し上げます。十方の如來様方よ。何うぞ此道場にお入り下さい。それが爲に華を散らして御心に契ふやう此道場を莊嚴致します。

御招待申し上げます。教へ主でまします釋迦牟尼如來よ。どうぞ此道場におはいり下さい。お心に契ふやう華を散して道場を莊嚴致します。

御招待申し上げます。救ひの親でまします阿彌陀如來様よ。どうぞ此道場におはいり下さい。お心に契ふやう華を散して

道場を莊嚴致します。

お招待申し上げます。如來様の御協士でましますと同時に、私達の理想とする先輩者たる觀音菩薩、勢至菩薩等の諸の大菩薩様方よ。此道場におはいり下さい。御心に契ふやう華を散らして道場を莊嚴致します。

(又は) 三奉請

奉請彌陀世尊入道場
奉請釋迦如來入道場
奉請十方如來入道場

備考 三奉請でも四奉請でも何れでも同じことで何れを使用しても差支へない。配列の仕方が、親しいものへと段々進めて行くか、又は親しい方を先にするかの相違に過ぎない。形から云つたら四奉請の方がいいやうな気がする。但しどう云ふ譯か四奉請は「吳音」で讀まず「漢音」にして居る。之だけ讀み方を變へて居るのは少し可笑しいが、暫く習慣に従ふことにする。

講 贊

私達は初めに身と心とを清淨にし、次で佛教信者たる表式と

しての歸依三寶を行ひつゝ、佛法僧に敬禮したのである。準備はほど調へられた。

だから今度は先以て心の殿堂へ主人公をお迎へしなくてはならぬ順序である。

一體私達の心は始終變化を續けて居て中心が定まつて居ない歴縁對境と云つて縁に従ひ境遇に隨ひ、轉々としてコロコロころがつて行くのである。だから一心の師となつて心を師とせざれ」と云ふ言葉もある位である。

だが、私達には心の師となり得るだけの力がないのだから、兎もすれば凡情の儘に使役されて行くのである。

「一人一日の中、八億四千萬の念あり、一一の念皆な三途の業なり」

で實に淺ましいのが私達である。親鸞上人は「地獄一定」と云はれたが、本當に私達は地獄一定のものである。一つとしていいことはない。貪欲瞋恚愚痴の中にとちこめられて少しも動きがつかないのである。

少しばかり善い事をしやうとしても、直ぐ算盤勘定が出て來る。そして他人の善事を見ては嫉み、失敗を聞いては喜ぶ。何と云ふひねくれ者であらう。其癖自分の悪い事には氣がつかず、他人の事ばかりに目がつくのである。一寸でも善い事をすれば宣傳これ務め吹聴して廻らないと氣がすまないのである。

然しそれも野放途にして煩惱のなすが儘に委かせて居るからであらう。古い歌に

傀儡師胸にかけた人形箱鬼を出さうと佛出さうと

云ふがある。即ち他人に對しては鬼心を以て臨み、自分に對しては佛心の寛容の態度を持つて許して居るのが私達なので、誠に以て手前勝手な我儘者である。

或る聖者は

「人の心と云ふものは恰度野中の一軒家のやうなもので、泥棒が住めば盜賊の家となり、佛像を安置すれば旅人が安心して休息の出来る佛堂となる」

と云つたが、本當にさうである。同じ板でも雪隠の踏板にもなれば、料理をするまじいたにもなる。板其物に變りはないけれども、使ひやうに依て綺麗にもなれば汚なくもなるのである。

私達の心もまたやりやうに依ては淨化しない筈はない。今まで巢喰つて居た惡魔を追ひ出し、常に如來様を御招待申して如來様が私達の心に住まつて下さるならば、随分低劣な賤しい心であつても、一邊に變化して貴い心とならない筈がない。

かゝる意味から、今四奉請なり三奉請なりを唱へて、十方の如來様、別けても救へ主である釋尊、救ひ主である阿彌陀佛等の貴い御佛様方を御招待申し上げ、自分と共に居て頂くことを御願ひすることは、私達の修養生活に取つて何の位嬉しい事か

分らないのである。

四奉請に於ては初めに天地十方の如來様方を招請し奉るのである。何れの如來様も自覺々他覺行の圓滿し玉へる「覺」の完成者でましますから、其綜合されたる「覺」は天地に遍滿して居り、そして私達へ其力を加へ玉ふのである。だからそれはまた綜合せられたる「恩處」として有り難く且つ貴く受け取られる譯である。

然かも十方の諸佛は阿彌陀佛の本願を讃歎して念佛者を護念し玉ふこと、阿彌陀經等に依つても明らかなことであるから一層尊い事でもある。

次に釋迦牟尼佛を御招待申し上げる。釋迦牟尼佛は私達に眞實の道理を教へ、眞實の信仰を教へ、眞實の生活を教へ玉ふた教主でましますからである。若し釋尊居まされば眞理をも知らず眞生を求むる氣にもならなかつたであらう。釋尊が私達に阿彌陀佛を教へ玉ふた事は私達に取つて此の上もない大なる恩寵である。無緣の大慈悲を以て末代の私達を慈念し給ふが故に、阿彌陀佛の本願をお示し下さつたのである。無量壽經には「無盡の大悲を以て三界を矜哀す。所次に世に出興して光く道教を開き、群萌を拯はんと欲して惠むに眞實の利を以てす。無量億劫にも値ひ難く見難し」と云つて居るが、今私達が如來の悲願を喜ぶことの出來たの

も釋尊あるが故であつて、本當に有り難いことである。

其上釋尊は私達と同じやうに人間だつたのである。人間としての生活もなされたのである。そして御修養に依て人間としての最高の御人格にまで達し、幾千萬の人々から尊敬され、人智が發達し文化が高くなるにつれて、愈々光を發揮し益々其眞價を増しつゝある事實を見る時、私達は大きな喜びを以て愈々崇敬せざるを得ないのである。

第三には私達の信仰の中心であり本尊である救ひの主を勸請し奉るのである。阿彌陀佛こそは信仰の根本であり根源であります。阿彌陀佛なくして本當に高い信仰には至り得ない。或は「彌陀は諸の母である」と云ひ或は「諸佛は阿彌陀佛國から出た」と云ふのも「生命の根源」であり「諸徳の中心」であり「信仰の本據」であるからであらう。觀音菩薩も阿彌陀佛を寶冠に頂いて居られるし、勢至菩薩も「念佛心を以て無生忍に入りたり」と「圓通章」に告白して居られるし、大經には「諸佛の國に居る諸大菩薩が阿彌陀佛を見たとまつらんと發心して恭敬し供養し信行すれば淨土の七寶の華の中に自然に化生する」ことを云つて居るなど、諸佛諸菩薩が皆な彌陀を中心として居られる事が分る。

隨分諸佛諸菩薩への信仰も世の中には色々あるけれども、其諸佛諸菩薩御自身が阿彌陀佛を信仰の中心として居られること

を思へば、阿彌陀佛こそ一切の信仰の根源であり中心であり綜合であることがハッキリするであらう。

觀音さまが阿彌陀様を頂いて居るのは觀音さまが阿彌陀様なしには居られないからである。だから觀音様を信するならば、觀音様をお手本にして阿彌陀様へ心を傾けなくては本當の觀音信者とは云へない。唯だ觀音様へ御利益をおねだりするやうな信仰の仕方では、恐らく觀音さまも苦笑せられるだけで、本當に喜んでは下さらないであらう。

不動さまへの信仰も其通りである。

不動様が阿彌陀様の蓮臺を頂いて居るのは觀音様と同じやうに阿彌陀様なしでは居られない事を表示して居られるのである。唯だ觀音様よりもモットへりくだつた氣持から、阿彌陀様のお姿でなしに阿彌陀様の坐を念頭に浮べ、そして其寶座の上に如來ましますことを想像して居られるのである。だから一面から云へば觀音様よりも不動様の方がまだ阿彌陀佛への信仰が高くないことを現はして居るとも云へるのである。

それは私達が念佛する時、初めの間は如來様を念はふとしてもボンヤリして居て中々お姿がハッキリ念頭に浮ばないものであるが、蓮臺とか圓光とかの私達日常生活の中に直接見なれたものの方が想像し易いことから類推して見ても其邊の消息が判るのである。

だが其婆念の差は何れともあれ、不動様が天部の神でありながら、阿彌陀様なしでは居られないことを表示して居られる以上、本當に不動様を信するならば、不動様のなさるやうに阿彌陀様へ心を傾けなくては恐らく不動様も心から喜んで下さらないであらう。

かくの如く阿彌陀様は一切の信仰の綜合であり大宗であり中心である譯であるから、阿彌陀佛が「諸佛の母」と云はれたことも納得される譯である。随て私達が阿彌陀様への信仰を確立する爲に、私達の心腹で阿彌陀様を御勸請申し上げることは大なる喜びであると共に、大きな感激を覚える次第である。

第四には觀音勢至の二大菩薩を始め一切の諸菩薩を勸請するのであるが、阿彌陀佛を信する者に取つて觀音様も勢至様も全く理想的な「信者」の極致であり先輩者であるからである。

阿彌陀様は大慈悲でましますと共に、大智慧でましますことは、今更ら云ふまでもなく判り切つて居る事である。無量光は大智慧を表はすものであり、無量壽は大慈悲を明かすものだからである。

觀音様は阿彌陀佛の補處の菩薩即ち跡續ぎの御方として如來様の慈悲を受持たれて居られる。法華經第十八品即ち俗に云ふ觀音經と云ふお經の中にある「世尊」は現在二十六偈になつて居るが、近來發見された梵本には此あとに七偈があつ

て三十三偈になつて居るさうである。我國では高楠博士に依て初めて譯されたが、其中に

「常に左右の邊に待し彌陀尊を扇涼しつゝ三昧の幻力を示し一切の佛を供養す」

とあり、更に阿彌陀佛を禮讃して

「是の如き世界尊は三界に等倫なし禮讃して功德を積み速かに最勝人とならん」

とあるが、之で見ると明らかに觀音様が阿彌陀佛の左右に侍しつゝ、人々に阿彌陀佛への信に依て最勝人とならんことを勸めて居られるのである。

また勢至菩薩には阿彌陀佛の大智慧を受持たれて居る菩薩である。阿彌陀佛の大智慧は「佛智、不可思議智、大乘廣智、無等無倫最上勝智」と經典に説かれてあるやうに、實に等倫なき最上の勝智である。それを此菩薩が分け持たれて居るので大勢至即ち大力の極まる處と名付けられたのだと云はれて居る。三邊にさまよつて居る衆生を覺醒せしむるに無上の力を持つて居られる、それが大勢至菩薩である。頂上に一つの寶餅があつて其中に智慧の光明が盛られて盡くるところがなく、觀音様と共に阿彌陀様の左右の脇士としてなくてはならない菩薩でましますのである。法然上人は幼名を勢至丸と云はれ此菩薩の化身と稱せられて居るが、さすがに「智慧第一」とたゞえられた程の智

者だつたからでもあらう。法然上人を信ずる私達に取つてはまた此の上もなくつかしい菩薩である。

また次ぎには來迎の聖衆二十五菩薩を始め無數に居られるであらうところの淨土の菩薩方をも念頭に泛べて勸請申し上げるのである。無量壽經には此世界に於ける六十七億の不退の菩薩及び他方十三佛國の二千二百五十四億并に無數不可稱計の菩薩方が彌陀佛國に來生して居る旨を説いて居る。しかもそれは略説であつて實には一劫と云ふ長い時間夜も晝も數へ通しに數へても數へ盡くされない數だとことはつて居る程、無數の菩薩方が居られるのであるが、觀音勢至を始め是等無數の諸菩薩は、常に念佛する人達の周圍を取りまいて護つて居て下さるのである。

かくの如く彌陀釋迦二尊を始め十方の諸佛并に觀音勢至等の無量の諸菩薩を、私達の道場へそして私達の心殿へ御勸請申すことは、何んなにか私達の心を清め、私達の周圍を恐れなきものとし、私達の將來を安らかにのどかにするか分らないのであるから此四奉請の一つだけでも私達に取つては本當に嬉しい限りでなくてはならない。

「歡喜踴躍するところ善心生ず」

で、私達はもう既に信仰の門に入つたのである。いや、既に廣い意味での念佛をして居るのである。

私達は今、洋々たる信の大海へ、順風を孕んで船出をしたのである。前途は希望に輝いて居る。

全く晴れ渡つた空には數限りなき美しい妙華が降り散つて居る。色取り取りの妙なる華が散り亂れ、微妙な音樂さへ鳴り響いて居る氣持もするのである。幸多き私達の前途よ。それは信仰する者のみの知り得る喜びである。

かくて私達は尙ほ色々の風光に接しつゝ、前進を續けるであらう。

(字 解)

十方——東西南北、四隅、上下の十方。

如來——如々來現即ち眞實の相を以て現はれ來るもの。

道場——釋尊成道の場所を場所を云つたものが、轉じて修行をなす場所にも名付けらる。隋の煬帝の時、寺院を道

場と呼び初めたとも云ふ話である。我國ではもと寺院と道場とを分け、在家の佛間に於て佛事をなすを道

場と呼んだ由であるが、後には寺院在家の別なく佛事をなす所を道場と呼ぶに至つたのである。

散華——印度の風習にて室内を來客の時、種々の花を散らして莊飾することから佛へ供養する爲に行ふのである。

樂——身心適悦とも云ふ。身も心も歡喜すること。

(その他の字解は六四頁にのせてあります。)

信仰
實話

不思議な夢

藤井敏雄

夢は五臓の疲れとか、種々變つた思ひもかけぬ夢を見て喜んだり悲しんだりするものです。

横死や病死の人が夢枕に立つたとかなどの話は實際耳にすることです。私が見聞した尊い信仰上の不思議な夢の話をありのまゝに書いて見ませう。

古河商業學校校長生駒先生は大和長谷寺化主大僧正小林正盛師と御親交がありました。今は小林師は遷化せられて在りませんが、今から五年前のこと、先生がチブスに罹られて、宇都宮の病院に入院中に見た大僧正に關する不思議な有難い夢の話です。

高熱が幾日も續いて最も危篤状態にあつた

時のこと夢は古河に飛んで先生は書齋で讀書に耽つて居りますと大僧正の御聲が何處からともなく聞こえて來るのでした。

『長谷の觀音様に御參詣なされよ』

(此處に云ふ長谷の觀音様とは古河町の南の方新鄉村長谷に在るものを指します。今より四百四十五年前、明應年中に古河公方成氏の鎌倉長谷より勸請したる十一面觀世音で、大和の長谷、鎌倉の長谷と共に日本三長谷觀音として古河鬼門佛である。)

先生は此の御言葉の通り御參詣仕様と思ひましたが、まだ一遍も參詣に行つたことがなく路順も判らないので思案して居りますと、『それでは先づ雀神社に行きなさい、そらす

れば判るであらう。』

と亦も大僧正の御聲が聞こえました。

雀神社は町内にあるので早速行きますと、社前に神官が一人、青竹の杖を奉持して先生の來るのを待つて居ました。神官は恭々しく青竹の杖を先生に渡しながら云ふことには、『此の杖を銜いて南へ向つて行きなさい、あなたの目指す長谷觀音に行くことが出來ます。』

先生は青竹の杖を有難く頂へて南へと足を運びました。

雀神社の境内から續いてゐる堤防(渡良瀬河畔)を歩いて行くと快晴の秋の空には小鴨が數拾羽群れ飛んでゐて麗かな物靜かな日でした。

何の造作もなく先生は長谷の觀音様に御參詣することが出來ました。

そこで大僧正の溫顔を拜して喜びの餘り感窮つて何か云はんとしたと言葉も出ずこみ上げる感激に浸つて居りますときにフット夢が消えたのでした。

不思議な夢を見た先生はその日を境に危ふまれたさしもの高熱も下り幾分かづ、快方に向つて行きました。

不思議な夢を見てから二日目大和の長谷寺



から大僧正小林正盛師の見舞狀が先生の所に届きました。

その手紙には、病氣治癒の祈を籠めてゐるから、日ならずして全快するであらうと云ふ有難い御言葉が書いてありました。

『あゝ、それで不思議な夢の謎が判つた、大僧正がこの手紙を御書きになつてゐる時に私は夢を見たのに違ひない。』

と、先生は大僧正の御慈悲の籠るその手紙を腹部に當てて肌身離さず、長谷観音を念じて居ります裡に間もなく病氣全快、退院の欣びの日が訪れました。

先生は現在も尚、古河商業學校長として斯界の爲に御元氣な御活動をなさつて居ります。

(此の不思議な夢の話は先年、古河信生講例會の席上で先生が感慨深く語られたるものを先生のお許しも乞はず私が獨斷で發表した次第です。)

次に私が経験致しましたるものを書きませう。これも矢張り病氣に關係した不

思議な夢の話であります。

今から七年前のことです。私は肋膜炎に罹り、非常な高熱と胸部の疼痛に悩み、日夜温濕布を續けてゐる時に不思議な夢を見ました。私は街を一步曲つて寺の山道へ入つた時にあまりの暗さに佇んでしまひました。

毎日通るこの山道がどうして歩けないのかと不思議に思ひつゝ、尙も歩かうとしますがどうしても暗くて歩けないのです。

すると突然、パツト非常に明るい光線が流れて來て私の脚下を照らすではありませんか、救はれた私はこれなら歩けるぞと山門に向つて歩き出しました。

私の脚下を直徑二米程の圓い光芒が取りまいてゐる、いつの間にか合掌し念佛を申してゐる私は圓い光芒に包まれ照らされながら、石段を登り山門を通り抜けると、そこには私の住む寺とは異つた朱塗の手摺のある廊下の突き出た大伽藍があつて、澤山の人々が集まつて居りました。

境内は眞晝の如く明るく、大本堂では今や

法要が行はれて居りました。私は唯々有難く、嬉しく、群衆の念佛の聲に和して南無阿彌陀佛、々々々々々、と感激の念佛を致しました。

念佛を妨げる話聲が交つて来て急に群衆がザワつき初めましたので私は大きな聲を出して話聲を制止しました時に、ハット夢から醒めたのでした。枕邊には家族の人達が愁ひに沈んだ顔を並べてゐました。

夢の中に聞いた念佛は私の病床にて念じた心からの父の念佛の聲だったのでした。

念佛を妨げた話聲は心配顔に私を看護つてゐる人達の聲だったのでした。

『私は救はれたのだ、きつと全快する。』

と云ふ欣びの裡に日一日と熱も下り胸部の疼痛も薄らぎ二ヶ月の後には戸外散歩も出来る程になつたのでした。

それから現在に及んで大分思ひ切つた仕事もやつて居ります。

十一月十五日には古河町の四分の一の各戸を佛教團の方々と共に托鉢して歩き一里餘の

所を廻りました。托鉢は國防献金、軍人援護の淨資を得ん爲であり佛教團主催、役場後援のものでした。此の先、毎月十五日には尊い奉仕を致します。私は奉仕の出来ますことを限りなき如來の御加護である

と感謝致して居ります。

私が眞暗な中に歩く事も出来ないでゐるとき私の脚下を照らして下さつたのは申すまでもなく如來の御光であり尊

い御加護でありませう、此の不思議な夢の話は機會ある毎

に私は人々に話しました。

私達凡夫の救はれる道は唯一つ、念佛申すことに盡きる

と思ひます。

私は大病を患つて初めて眞の念佛を口にすることが出来

ました、信仰の尊いこの體驗は私をして、病んで良かつたと云はしめます。それは負け

惜しみではありません、大病を征服した人なら誰でも、病んで良かつたと云ふでせう。佛の御光と人の愛と、健康と、物質の有難さ、尊さを苦惱を以て體驗するからです。(終)

「心への主人公」字解 (六一頁より)

釋迦—釋迦族の總名なれども、釋尊は釋迦族中の最高人格者なりとの意味で釋迦牟尼と稱したことから、遂に釋尊を單に釋迦とも呼ぶに至つたのである。

阿彌陀—無量と譯す。一切のものが無象なる義である。別けても「壽」と「光」とが人間に取つて最も大切なものだから或は「無量壽」とも「無量光」とも稱するのである。また別名を觀自在王如來とも云ふ(觀音の名と同じ)三千塵點劫の昔大通智勝佛の第七子なりしと云ふ傳説がある。

觀音—觀世音又は觀自在と云ふ。師長の徳を頂きて寶冠に阿彌陀佛を頂戴し玉ふ。

勢至—大勢至と云ふ。父母の骨を頂く。頭上に光明を盛つた寶瓶がある。

菩薩—委しくは菩提薩埵摩訶薩埵と云ふ。菩提は「覺」薩埵は「人」摩訶薩埵は「大人」と譯す。即ち「覺」を目指して進みつゝある大いなる人のことを云ふのである

編輯部だより

◆聖戰第三年を迎ふる新春に際して謹んで御挨拶申上ります。長期建設の、苦難にみちてはゐるが、輝かしい未來を持つこの年に我々は一層決意を新たにしなければなりません。支那全土に流された尊い戦士の血潮に敬虔なる感謝を捧げると共に、愈々銃後の守りの固からんことを祈念してやみません。

◆浄土も第五年を迎ふることになりました。われわれも會員、愛讀者諸賢の熱烈な御支援の下に、幾重の困難を克服し、教界に於いて既に押しも押されぬ第一線の雑誌となることが出来ました。然しなほ目的地は遠くにあります。何卒今後とも變らぬ御支援によつて法然上人鐵仰運動の進行に力を與へられんことを。

◆本月の巻頭には故渡邊海旭師の御遺稿を掲げました。師は云ふまでもなく浄土宗のみならず、日本が曾つて有した偉人の一人であります。師が現代と浄土宗に就いて語られた一言一句は今もなほ陸離たる光彩をはなれてゐる。この稿の發表に就いては金田明進師の御盡力に負ふところ大でありました。誌上より謹んで感謝いたします。なほ今月掲載いたしました分は約三分の一でありまして、あと二回に渡つて連載いたします。

◆本月の隨筆陣には文壇の諸大家を網羅いたしました。吉田絃二郎、佐藤春夫、倉田百三、岡本かの子諸先生が本誌のために進んで御寄稿下さいましたことは本誌の價値を一段と高め得たこと、信じます。また畫境の雄將近藤浩一路先生も談話をおよせ下さいまし

た。諸先生に厚く御禮申上ります。

◆法然上人の末裔たる立石欽一氏を中心とした第二回座談會の記事も本誌獨特のものでありまして學問的興味と信仰的味ひと兼ね持った有益な讀物と信じます。

座談の内容は發表したものよりも多岐に渡り豊富なものでありましたが、誌面の都合上多くを割愛せざるを得なかつたことは非常に残念でありましたが、あれだけでも充分に讀む者の心をたのしませるに足るものと存じます。

◆その他の讀物も精選を重ねたつもりでおります。今月も掲載いたし度い原稿は澤山ありましたが限りある紙面のことゝて次號に讀つたものも多くありました。本誌のため進んで御寄稿下さいました方々に何卒御諒承願ひ度いと存じます。(道瀨)

浄土 一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十三年十二月三十日印刷納本
昭和十四年一月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人鐵仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「浄土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料五厘)

一ヶ年 金一圓
(送料不要)

我が信仰

四六判二色刷表紙付
定價六錢（送料三錢）
二十部以上一時に購入
の方には一部五錢とす。
法然上人鑽仰會編

法然上人鑽仰會編

— 內容 —

信	念	懺	本	知
仰	佛	悔	願	恩
郁芳隨圓	武者小路實篤	吉田絃二郎	佐藤春夫	岡本かの子

文壇の巨星が語る信仰の體驗！

この時代の信仰は？ 念佛の眞骨
頂は？ 法然上人は？ 文壇の巨星
が隨筆風に表現された、新鮮な信仰
の言葉は何人の胸にも法悦の燈びを
點ぜずにはおかない！

この内容、この定價！本書こそ布
教用書の最高峰を行くものである！

會仰鑽人上然法・所行發

七八一二八京東替搬
館會照明團公芝京東

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十三年十二月廿日印刷納本 昭和十四年一月一日發行

淨

土 第五卷 第一號

定價金十錢(送料五厘)
滿鮮臺等
外地定價金十一錢